

宮城学院女子大学大学院

人文学会誌

第 16 号



2015年3月

英語・英米文学専攻
日本語・日本文学専攻
人間文化学専攻
生活文化デザイン学専攻

目次

夏目漱石文学の研究―『それから』を中心に―

伊狩 弘 1

修士論文題目及び内容の要旨

『永日小品』論

鈴木 麻綾 29

室生犀星における魚のイメージ

鷲尾 日香里 31

日本語学習者のスタイル切り換えの習得と要因についての一考察
―ロシア人母語話者を対象に―

藤田 知里 (19)

新たな日本語教育スタンダードを取り入れた授業の実践報告

安田 佳奈枝 (1)
榎 華 緒

夏目漱石文学の研究

— 『それから』を中心に —

伊 狩 弘

1

日本近代文学を代表する作家は夏目漱石と森鷗外だと言われる。その主な理由は、この二人の作家が明治という時代や国家と非常に近い関係を持った作家だと言う所にあるのではないか。漱石と鷗外は、一人の作家というより、明治時代の日本に出現した大きな知性であり、近代日本の命運を担うべき文学的啓蒙家であった。二人に並ぶのは坪内逍遙であるが、逍遙は『小説神髓』の意義は大きいが教育者とその他にはシェークスピアの翻訳や演劇の啓蒙活動の面が多めで、小説家文学者の面は活動が段々と小さくなったのは致し方ない。漱石と鷗外は国家の将来を託されるかたちで、ドイツやイギリスに留学しそれぞれが英語学、軍事衛生学などの分野で国家に貢献することを要求され、その傍らで文学者としても活躍した、所謂二足の草鞋的な作家であったことも共通する。ただ漱石の方は早く二足の草鞋から足を洗い、朝日新聞の専属作家になった点が異なる。新聞社員の作家は漱石が初めてでは勿論なく、明治中期に紅葉も露伴も読売新聞に入社するなどのことはあったわけだが、月給二百円という待遇は他には例がないように思われる。漱石と鷗外は自らの意志であったかは別として、国を背負って立った、背負わされた作家であった。私費で外遊したり留学したりした作家は数々あるが、国

費で留学した文学者はこの二人以外にはいないのではないか。明治の文学者では他には島村抱月が早稲田大学の寄附金を貰ってドイツ・イギリスに遊学したのがあるくらいであろう。漱石は留学時代も含めると英語英文学の教員を約十年間勤め、その後新聞小説家として十年活動した。鷗外は明治十四年に東大医学部を卒業して軍医になり、以後だいたい三十五年間軍医を勤め、退職して予備役になったのが大正五年、大正六年に宮内省帝室博物館総長兼図書頭に就任しその職に就いたまま大正十一年七月九日に亡くなった。その間ドイツ留学は四年間、日清日露の戦争には合わせて三年間ほど従軍して旅順や大連、満州方面に転戦した。また、小倉の第十二師団軍医部長に赴任した、左遷と言われる三年間もあった。『スバル』時代に現代小説を多作し、その後の歴史小説として『椋鳥通信』のような海外事情の紹介など多様な活動があるわけだが、全くの小説家だった時期はない。やはり啓蒙的文学者と言ってよいだろう。常識的な事をここで再確認したのは、明治時代の他の小説家、文学者に比べると漱石・鷗外はいろいろな意味で背負ったものが大きかったことを確認しておくことは漱石・鷗外の文学を考える上で重要だと思われるからである。近代日本の直面した種々の問題が漱石文学にどう影響しているか、『それから』について考えたい。

夏目漱石『それから』は明治四十二年六月二十七日(日)から十月十

四日(木)まで、百十回にわたって『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』に連載された。前年の『三四郎』(明治41・9・1～12・29)と翌年の『門』(明治43・3・1～6・12)と合わせて前期三部作と言われる小説である。またこの小説の掲載前に『それから』予告(『東京朝日新聞』明治42・6・21)が発表された。

色々な意味に於てそれからである。「三四郎」には大学生の事を描いたが、此小説にはそれから先の事を書いたからそれからである。「三四郎」の主人公はあの通り単純であるが、此主人公は最後に、妙な運命に陥る。それからさき何うなるかは書いてない。此意味に於ても亦それからである。

漱石が『それから』を書き始めたのは、明治四十二年五月三十一日であることが日記から判明する。そして六月十二日付山本笑月宛書簡には、

「それから」の予告別紙認め候、可然御取計願上候。大阪へは小説の名前通知致し置かず候故予告文とともに御廻し願上候

原稿は十八九日迄に出来た丈可差出候 草々

とある。山本笑月宛の他の書簡を見るに原稿は二十回分または三十回分をまとめて京橋区滝山町の朝日新聞社に郵送した。この事実と予告文の内容と合わせて考えれば、漱石は構想を立てて、結末を或る程度見通した上で執筆に取り掛かったことが窺える。八月九日の日記には「それからの第百回を半分程書いてから又書き直す。「それから」を書き直したのは是で二返目也。」とある。日記によつて八月十四日に書き終わったことが分るので二月半で『それから』は完成した。その間、少なくとも二回書き直した。こうして書かれた『それから』の主題、或は問題意識の根本は何だったのか。

『それから』は全部で百十の小段が十七に分れていて、仮にそれぞれを節と章と呼べば、十七章百十節からなる。それぞれの章は長さがまちまちで、最も長い第十四章は十一節からなり、これは代助が三千代に告白するクライマックスと言うべき章である。次に第十六章は十節構成で、これは平岡と代助の対決場面を含む。末尾の第十七章が最短の三節で、これは小説のエピローグ部であるから短い。この小説はプロットが比較的まとまった団塊をなして全体を作っている。小説をごく簡明快に要約すれば、ある時長井代助の前に平岡常次郎・三千代夫婦が上京して来た。それは三月末に平岡から手紙が来て、夫婦で上京すると知らされた後の四月中旬のことであった。同じ頃、代助は父親から「甚だ因念の深いある候補者」との縁談を迫られる。その後、代助と平岡・三千代の付き合い、代助と父親・兄・嫂らの交流と悶着とがあり、縁談と不倫的愛とで悩んだ挙げ、代助は三千代に不義の愛を告白し、親友の平岡から絶交復讐され、父と兄からも絶縁される、というストーリーである。その期間は春(四月中旬)から夏(七月末か八月初め)までの約四箇月であると考えられる。このように『それから』の作品内時間は執筆時期の二か月ほど前に遡つた日にちから始まり、擱筆時期とほぼ同じ頃合いまで進んで終了する。このように漱石の執筆時期と小説の時間はだいたい重なり、その数箇月のうちに物語はほぼ直線的に進行する。

『三四郎』には、いろいろ面白い寄り道的挿話、即ち「偉大なる暗闇」の広田先生の存在や広田をめぐつて与次郎が活動したり、文学や演劇をめぐつて三四郎を先導したりすることで深さや広さが加わったのだが、『それから』にはそうした副旋律というか、補助的挿話があまり見られない。

漱石は『三四郎』連載中の談話「文学雑話」(『早稲田文学』明治41・

10)でズーデルマンの『カツエンステッヒ』に触れて次のように述べる。

そして其の書き方——恠ウツういふシチュエーションに在る二人のラヴの書き方が面白い。男にはシムパシーが無く女にもラヴが無い——或は無意識に働いてゐるかも知れぬが——それが追追に動かされて行くプロセツスを旨く書いてある。口で云ふと訳のないやうなものゝ、書くとなると困難な面倒なもので、兎角不自然になり易いのは誰れも知つてゐる事で、ことに刺戟の強い殆んどセンセーショナルに近い場ばかり並べてあるにも拘かかはずそれが非常にナチュラルで、デュヴェロプメントが層々累々とシフトとして行く移り工合が大変旨い、詮つまり私は深さのある小説だと思ふ。

このように述べて、「エキステンション」があつても「デップス」がないと広さはあつても「余り興味がアクセレレートせられない」ことになると言ひ、「即ち同じ男女の間のラヴ、アツフェアズでも毎日出逢つてゐるのに同じ戯たはけた話をして駄目だからして、何等かの変化を与へねばならぬ。而かも其れが場所の動かない処である、何うも単調になる。変化を与へる事が困難だ。併し変化ばかりあつて統一ユニティーを失つては可けない。だから統一はあつても単調にならずに変化を与へて調子を変へて行く、余りレペティションをするやうで段々と新しい所を加へて行くといふ書き方、それが甚だ困難である。」と語る。またズーデルマンの『アンダイ、ング、パスト』について「層々累々」の書き方を用いてと言ひ、フェリシタスアンコンシヤス「無意識な偽善家」と称したと言ひ、『三四郎』の美禰子をそう評したことはよく知られる。このように漱石は小説というものは「層々累々」が大切でつまり、「コーザリティー」に加えて「エキステンシヨ

ン」や「デップス」が必要、その微妙な連係が小説の妙味になるといつた主旨のことを語っている。ドイツの劇作家の作を文学作品のよい見本としているわけだが、やはり外国文学に標準を合わせようとしていることが窺える。既述したが、『三四郎』にはこうした筆法が顕著で、三四郎と美禰子との恋愛の顛末に加えて「偉大なる暗闇」の広田先生の存在、そして三四郎を出して使つて広田を世に出そうと企む与次郎の活動が補完的に進行するかたちになっている。ところが『それから』には与次郎や広田先生のような恋愛の局外者圏外者でストーリーを賑わす人物は居らず、複線構造にはなっていないのが『三四郎』とは少し異なる。強いて言えば、代助の父親長井得、幼名は誠之進が青年時代に高木という人に命を救われたという逸話、その高木の養子には子供二人がいて、そのうちの女の子が「県下の多額納税者の所へ嫁に行」つている。それが佐川家で、その娘が代助の「細君の候補者であるという、多少込み入った縁故に繋がる娘を代助は父親から嫁として勧められる。そしてその縁談には父親の何らかの思惑があるやうで、代助は父の世俗的な或は実利的な思惑の絡んでゐる縁談に反感を感じる。しかし代助が三千代に不義の愛を告白することとこの縁談とはそもそも無関係だと考えれば、「甚だ因念の深いある候補者」との縁談という話柄そのものが「エキステンション」であるとも見得る。代助は父親に勧められた縁談を断るために三千代に接近したというわけではないだろう。また、平岡と代助の人生観が異なるとの理由で三千代を奪おうという気になったのでもないやうである。しかし、「同時に代助の三千代に対する愛情は、此夫婦の現在の関係を、必須条件として募りつゝある事もまた一方では否み切れなかつた。」(十三の四)とあつて、平岡が三千代を疎外すること、即ち夫婦の疎隔が代助の三千代への愛情若しくは同

情を昂進するための条件であるのは明かである。しかし「彼の愛はさう逆上してはゐなかつた。」とあるとおり、必要条件であつても、それだけで代助の三千代への愛情が人倫の壁を突破して暴発するとはなかつた。ではどのようなものがあつて代助は世間の規矩準繩を超えた地平に進み出ることになつたのか。その読み筋を探つてみたい。

2

『それから』の書き出しはよく知られるところだが、次に引用する。誰か慌たゞしく門前を駈けて行く足音がした時、代助の頭の中には、大きな組下駄が空から、ぶら下つてゐた。けれども、その組下駄は、足音の遠退くに従つて、すうと頭から抜け出して消えて仕舞つた。さうして眼が覚めた。

枕元を見ると、八重の椿が一輪畳の上に落ちてゐる。代助は昨夕床の中で慥かに此花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謨毬を天井裏から投げ付けた程に響いた。夜が更けて、四隣が静かな所為かとも思つたが、念のため、右の手を心臓の上に載せて、肋のはづれに正しく中る血の音を確かめながら眼に就いた。(二の一)

非常に印象的で暗示的な書き出しで、小説の全体像や代助の性質をこの冒頭から類推することも可能なだろう。頭の中に大きな下駄がぶら下がるのはどういう意味なのか。胸に手を当てて血の音を確かめながら眠る人はどういう人だろう。要するに代助は明治四十二年頃の日本に生きている普通の青年ではない、特殊な頭脳と感覚を持つ青年であるということのようだ。小説を読み進めれば分るが、

恐らく代助は通常の明治人からは離れた感覚や意識を持ち、実際にその独特の感覚で生活し考えている特別の若者のようである。ただし、親に寄食していて働く必要のない無業者であり、特権階級的な存在である。しかも芸者遊びなどの世俗的な知識や経験も十分に持っているらしい。なぜ漱石はこのような特殊な、時代を超越したような若者を主人公に据えたのか。それは文学によつて明治日本の現実になんらかの相対化の視点を提出せんとする意図があつたからではないだろうか。

代助は寢床の中で新聞に目を通した。そこには学校騒動の記事などがある。これが東京高等商業学校の紛争で、この記事などから勘案してこの日が四月十三日だと推定できることは先に見たとおりである。蒲団から出ると代助は風呂場に行き、丁寧に歯磨きをし、肌を磨く。頭髮や鬚の手入れも行った。代助は「人から御洒落と云はれても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は旧時代の日本を乗り超えてゐる。」のである。「旧時代の日本」とは単に男が身なりや顔立ちを気にしないということであろうか。あるいはより深い意味があるのだろうか。この段階では不明確であるが、後の平岡との対話や代助のさまざまの思考や行為から推察するに、代助は明治時代の日本の中に強固に残つている「旧時代の日本」の残滓、明治という新時代の皮を被つた旧時代の遺物を超越した遠い地点まで進み出ている人物なのである。それは代助の意識の中だけに限つたもので、御洒落や身体的ナルシズムの外の現実の行動として、例えば幸徳秋水のように、表れるものではないが、確かに代助は明治人の平均的な頭脳の水準を遙かに逸脱しているようである。一般人の中でも低級な部類の代表のような門野というのらくら書生が冒頭から出て来るが、代助は門野と自分の神経とを比べて次のように思う。

自分の神経は、自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感性性
に對して払ふ租税である。高尚な教育の彼岸に起る反響の苦
痛である。天爵的に貴族となつた報に受る不文の刑罰である。

(一の四)

このように代助は高い知性や思索力を持った「天爵」の「貴族」的人
間であり、その代わりとして極めて繊細過敏な神経の持ち主である。
このような神経は門野のみならず、鈍感無神経な庶民は持ち合わせ
ない、代助の特権と言える。しかし神経が繊細であるからといって
それが即「旧時代の日本」を超越していることにはならないだろう。
代助が超越しているのは人生観や労働観・金銭観などである。これ
らは時代の水準を大きく超え、革命的とも言える域にまで達してい
るのである。

小説は平岡常次郎が三年ぶりに代助の前に現われ、久しぶりに酒
を飲んだところから、いきなり本題に近づく展開を見せる。所謂低
徊趣味的に周辺を徘徊してから徐に本題に入つた『三四郎』などは
違い、『それから』は門野に少し戯れた位で、もう平岡との烈しいや
りとりが始まる。酒を飲んだ代助は二三日前に「ニコライの復活祭」
を見た後、深夜に上野公園を訪れた話をした。

「人気がない夜桜は好いもんだよ」と云つた。平岡は黙つて盃
を干したが、一寸気の毒さうに口元を動かして、

「好いだらう、僕はまだ見た事がないが。——然し、そんな
真似が出来る間はまだ気楽なんだよ。世の中へ出ると、中々そ
れ所ぢやない」と暗に相手の無経験を上から見た様な事を云つ
た。代助には其調子よりも其返事の内容が不合理に感ぜられた。
彼は生活上世渡りの経験よりも、復活祭当夜の経験の方が、人
生に於て有意義なもの考へてゐる。其所でこんな答をした。

「僕は所謂処世上の経験程愚なものはないと思つてゐる。苦
痛がある丈ぢやないか」(一の三)

このように平岡は代助の「無経験」を嘲笑し、代助は何らかの理由
で「職業替」をせざるを得ない平岡に對し、そのような「処世上の経
験」を愚弄する態度をとる。もうこの時点から二人の人生観社会観
は真つ向から對立して、鋭い思想對立の様相を呈していると言
つてもよい。引用した箇所ですぐ後で、「其苦痛が後から薬になる
んだつて、もとは君の持説ぢやなかつたか」と平岡は反論する。す
ると代助は「そりや不見識な青年が、流俗の諺に降参して、好加減
な事を云つてゐた時分の持説だ。もう、とつくに撤回しちまつた」
と言う。この代助の言葉を使い換えれば、平岡の今の考え方や言い
分などは俗世間の常識に冒された無知な青年の考えとさして違わな
い、取るに足らないものだと思つけるに等しい。このようにこの
小説は代助を中心にして、平岡、三千代、父親、嫂といった人物の
言説がぶつかり合つて、對話的、弁証法的に展開する。漱石文学の
特徴として、主に学校によつて出来る人間関係を中心にして更に新
たな人間関係を広げて行き、その人々の對話によつて小説を動かし
て行くということがある。明治以後新たに形成された学校制度、そ
こに集う青年たちの分け隔てのない交友はホモジニアスな人間の集
まりといつてよく、青春の純粹空間の様相を呈したようである。具
体的には漱石と子規を中心に一高・東大の頃の友人達の世界がそれ
に近いだろう。しかしそうした時期は長続きせず、少しでも社会に
接触し始めると友情の結束は綻びざるを得ない。漱石文学には近代
の学校制度の中で出来た人間関係が何らかの原因で破綻したり蹉跌
したりする傾向が見られる。そしてホモジニアスな関係を乱すもの
は金と女であるわけだが、それについては後述したい。本稿では金

鍍金の金と区別すべく、カネと表記することとする。カネと女という二大ファクターは漱石と漱石文学において何なのか。

さて、「代助と平岡とは中学時代からの知り合で、殊に学校を卒業して後、一年間といふものは、殆んど兄弟の様に親しく往来した。」(二の二)とあり、二人は十代の前半から十七年近くの友人だった。三千代との関係をまとめておくと、三千代の兄の菅沼は東京近県の出身で、大学生のとき代助らと知り合った。そして重要ではないかもしれないが、既述したように『それから』は実際の事件や『煤煙』の連載などを含む小説なので、実時間を辿れる。それに従えば代助らが大学に入ったのは明治三十五年九月、計算するに、菅沼はその一年後、三十六年に入学したようで、翌年の三十七年の春に「修業の爲と号して、国から妹を連れて来ると同時に、今迄の下宿を引き払つて、二人して家を持つた。」(七の二)ので、その時三千代は高等女学校を出た十八歳であった。明治三十八年六月に代助と平岡は卒業し、三十九年に菅沼の母と菅沼自身は腸チフスで亡くなったのである。そしてその年の秋、平岡と三千代は結婚し、間もなく大阪に赴任した。明治四十年に三千代は出産し、生んだ子はすぐ死んだ。こう見て来ると、代助と菅沼と三千代が「巴の如くに回転しつゝ、月から月へと進んで行つた。有意識か無意識か、巴の輪は回るに従つて次第に狭まつて来た。遂に三巴が一所に寄つて、丸い円にならうとする少し前の所で、忽然其一つが欠けたため、残る二つは平衡を失つた。」(十四の九)と書かれる時期は、おおよそ明治三十八年前後のことと推測出来る。このような前史があつて四十二年四月、平岡は部下の金銭不祥事の責任を被せられて辞職、上京した。まさに平岡はカネの絡みつく世の中で「処世上の経験」を積み、それが大事だと代助に教えているのだ。簡単に言えば、「ニコライの復

活祭」と夜桜を見る道楽趣味よりもカネが大事だろうと言うのである。しかしそのように変化した理由は判然としないながら代助に於ける世の中はここ三年ほどの間に、平岡に於けるそれとは随分異なつてしまつた。先程の「処世上の経験」は愚の説にも表れているが、平岡が「だつて、君だつて、もう大抵世の中へ出ななくちやなるまい。其時それぢや困るよ」と批判すると、代助は、「世の中へは昔から出てゐるさ。ことに君と分れてから、大變世の中が広くなつた様な気がする。たゞ君の出でゐる世の中とは種類が違ふ丈だ」と応ずる。そして平岡のしていることがあたかも「劣等な経験」だと言わんばかりに言い、更に以下のような例を挙げ得々と自説を語る。平岡は辟易としたのか、それとも苦々しく嘲つたのか。

「僕の知つたものに、丸で音楽の解らないものがある。学校の教師をして、一軒ぢや飯が食へないもんだから、三軒も四軒も懸け持をやつてゐるが、そりや気の毒なもんで、下読をするのと、教場へ出て器械的に口を動かしてゐるより外に全く暇がない。たまの日曜杯は骨休めとか号して一日ぐうぐう寐てゐる。だから何所に音楽会があらうと、どんな名人が外国から来やうと聞に行く機会がない。つまり楽といふ一種の美しい世界には丸で足を踏み込まないで死んで仕舞はなくつちやならない。僕から云はせると、是程憐れな無経験はないと思ふ。麵麩に係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麵麩を離れ水を離れた贅沢な経験をしなくつちや人間の甲斐はない。君は僕をまだ坊つちやんだと考へてゐるらしいが、僕の住んでゐる贅沢な世界では、君よりずつと年長者の積りだ」

平岡は巻簾の灰を、皿の上にはたきながら、沈んだ暗い調子で、

「うん、何時いつ迄までもさう云ふ世界に住んでゐられ、ば結構結構さ」と云つた。其重おもい言葉ことばの足あしが、富とみに対する一種の呪詛じゆそを引き摺ずつてゐる様に聴きこえた。(二の三)

右の引用の「学校の教師」は漱石自身の体験から揶揄的に持ち出したものだろう。漱石は松山・熊本・東京というように次に引く『野分』の白井同様、教師として各地を「流して歩いた」。ロンドンから帰つた後は、あちこちの教員を掛け持ちし、週に三十時間もの授業をしたのはよく知られる。そしてその体験を『坊つちやん』他の小説に用いたが、『それから』では知り合い教員の賃金奴隷的姿として引き合いに出す。それ以前では『野分』『ホトトギス』『明治40・1』の白井道也は、「八年前大学を卒業してから田舎の中学を二三箇所流して歩いた末、去年の春飄然と東京へ戻つて来た。」(略)のである。最初に赴任地は越後である。

始めて赴任したのは越後のどこかであつた。越後は石油の名所である。学校の在る町を四五町隔て、大きな石油会社があつた。学校のある町の繁栄は三分二以上此会社の御蔭で維持されて居る。町のものに取つては幾個の中学校よりも此石油会社の方が遙かに難有ありがたい。会社の役員は金のある点に於て紳士である。中学の教師は貧乏な所が下等に見える。此下等な教師と金のある紳士が衝突すれば勝敗は誰が眼にも明かである。道也はある時の演説会で、金力と品性と云ふ題目のもとに、両者の必ずしも一致せざる理由を説明して、暗に会社の役員等の暴慢と、青年子弟の何等の定見もなくして徒ら徒らに黄白万能主義を信奉するの弊へいとを戒いめた。

以上のように漱石は中学教師の貧しく惨めな姿をやや戲画的に描き、その教え子高柳をも合わせて金力や権力に抵抗を試み、青年た

ちを鼓舞せんとするのだが、長井代助は知り合いの教員を引き合いに出してそれがいかに哀れなつまらない人生かを説く。カネのために働くことは惨めで憐れなので、それは教師も一般の労働者も変りない。金力は人間を墮落させ、カネは人から自由を奪い、「美しくい世界」を奪う。「麵麴めんこくに關係した経験」は「劣等」なのである。そのように見れば『それから』は漱石が自分の教師体験に基づいた自嘲や不満を底に潜ませた小説であるとも言ひ得るだろう。では代助はなぜ飯とかカネと言わずわざわざ「麵麴」という言葉を使ったのか。「麵麴」と「水」とあるので基督教のパンを想起するが、それだけだろうか。カネは詰まる所世の中の仕組みそのもので、人の社会的な在り方の反映であろう。また「麵麴」や「水」は何らかの働きによって得られ、人の命を保つものである。それらを否定するような考えはどのようなものだろうか。また、代助の到達した水準に到らない平岡は「富に対する一種の呪詛」を抱く、カネ世界の奴隷のように描かれるが、代助は果して本当に平岡を超えているのだろうか。さて、代助の思想思考は以下の叙述即ち「二十世紀の日本に生息する彼は、三十になるか、ならないのに既にnii admirariニルアドミラリの域に達して仕舞つた。」また「代助は平岡のそれとは殆んど縁故のない自家特有の世界の中で、もう是程に進化——進化の裏面を見ると、何時いつでも退化であるのは、古今を通じて悲しむべき現象だが——してゐたのである。」(二の五)という。「自家特有の世界」が何・かよく分らないが、竹盛英雄は右引用などに関して次のように述べる。

代助の「肉体現在のところ病んではない。しかし、「精神」はもはや病的症状を露頭している点に注意しなければならぬ。あまりにも高名な一節であるが、「そんな好奇心を引き起すには、実際あまり都会化し過ぎてゐた。二十世紀の日本に生息す

る彼は、三十になるか、ならないのに既に *nisi admirari* の域に達して仕舞つた」という説明がこれにかかわってくる。漱石のこの説明は、唐突で実体不詳のものというほかはないが、作者はここに、現代の病める知識人の肖像をえがき出そうとしているように思われる。しかし漱石みずから説明しているように、作者は代助の「変化」の上に、「進化」とともに「退化」をもはつきりと見つけていることに注意しなければならぬだろう。

このように竹盛は代助のありようを「近代日本の過渡的状况に対応する小説的表現」と捉え、「間」の季節と呼ぶ。そして代助は三千代との結合によって、「俗物の閑雅な生活とそこから流出した近代日本における希有ともいふべき超越的視像の持主は、「間」の季節の特待席から消え去つてゆくことになる。それは一面からいふと病める「特殊人」から健康な「普通人」への更生ということもできるに相違ない。」というように仮説し、全体として「漱石の挑戦」と読んでいる。掬すべき見解であるが、果して代助は普通人に更生したのであろうか。竹盛が代助と三千代との愛について「その愛の生活の暗い予兆」を読者は既に感じ取るのではないか、と推理している通り、代助は更生したのではなくやはり「退化」したと言ふべきではないか。代助と平岡の議論に焦点を絞つてみる。四月二十日過ぎ、三千代は代助に金策を申し込み、翌日平岡は引つ越しをする。数日後の園遊会の折、兄から金策を断られ、次の日、代助は平岡宅を訪れた。「平岡の家は、此十数年来の物価騰貴に伴れて、中流社会が次第々々に切り詰められて行く有様を、住宅の上に善く代表してゐる、尤も粗悪なる見苦しき構へである。」(六の四)と言われ、また、「東京市の貧弱なる膨脹に付け込んで、最低度の資本家が、なけなしの元手を二割乃至三割の高利に廻さうと目論で、あたちけなく拵へ上げた、

生存競争の記念である。」とも評される。かくも明治末の都市は「生活慾の高圧力が道義慾の崩壊」(九の一)を招いた結果としての醜悪低劣な姿を呈しているというのである。平岡はその「生存競争」の人格化としての役割を与えられたと言つてよい。そして代助は「此生活慾の目醒しい発展を、歐洲から押し寄せた海嘯と心得てゐた。」という。即ちカネに支配される社会の到来が「道義慾」を殺ぎ、住宅の劣悪化まで招来したという訳である。平岡の家は伝通院より北側の小石川あたり、代助の貸家は神楽坂に近い東五軒町あたりと推定される、所謂山の手の一角である。そこで働く・働かない論争になるのだが、その前に渡金・金・真鍮意識の問題がある。

三四年前の自分になつて、今の自分を批判して見れば、自分は墮落してゐるかも知れない。けれども今の自分から三四年前の自分を回顧して見ると、慥かに、自己の道念を誇張して、得意に使い回してゐた。渡金を金に通うさせ様とする切ない工面より、真鍮を真鍮で通して、真鍮相当の侮蔑を我慢するほうが楽である。と今は考へてゐる。(六の五)

右のように「渡金」と「金」と「真鍮」という譬えがある。三年前頃は「親爺が金に見えた」とあるように相当の教育と地位を持った者は真から有徳の人達、人格者であると思つてゐた。これを「金」に譬えるが、実は皆が「渡金」であることをこの何年かで代助は看破したわけである。過去の自分は上辺だけ有徳者のようにしているけれども、中身は未熟で真の人格者には成つていないと思つてゐた。これが「渡金」と言われる人間の姿である。「真鍮」は表面を飾らない地金で、地のままの不徳の人間である。代助はここ三四年の間に「全く彼れ自身に特有な思索と観察の力」で父親によつて殆どなすりつけられた「渡金」を剥がし、「渡金を金に通うさせ様とする切ない工面より、

真鍮を真鍮まねで通して、真鍮相当の侮蔑を我慢する方が楽である。」と
いうある種の悟りを開いたのである。これは要するに世の人々の
「渡金」を看破した故に、「渡金」なのに「金」と偽るよりも、「真鍮」の
真実を生きようというわけである。しかし、自分の生き方が「渡金」
「金」「真鍮」のいずれに該当するかは難しい問題で、社会的な人間の
有り様はその時々においていづれかを使い分けるところに存する。
代助は英語や外国文学に精通し、実家の洋間のデザイナーをするくら
い美術の趣味があり、ピアノも弾ける。酒にも芸者にも強く、学問
と教養に溢れ、カネにも不自由しないし社交界にも通じている。門
野を見下し、寺尾を蔑視嫌悪している。このような超人的な人間が
「真鍮」で通すということは、謙虚であるよりむしろ傲慢、要するに
世間並みの人間関係を超越放棄することに外なるまい。後に見ると
おり確かに代助の思想は世の中を超越しているが、実体は果して超
越出来ているのだろうか。

友人の寺尾について考えてみる。金策が失敗した数日後の五月初
め頃、代助は「アンニユイ」を覚えたため芝居見物でもするつもりで
出掛けたが、気が変つて「森川丁にゐる寺尾といふ同窓の友達」(八
の二)を訪ねた。寺尾は『それから』のストーリーには直接には関係
なく、「エキステンション」的に登場する。『三四郎』に於ける与次郎
に似ている面もあるが、与次郎のように物語を牽引することはない。
しかし寺尾は漱石自身を多少投影しているとも見られ、代助の生き
方と対比して見ると、一定の問題を提出する人物である。「此男は
学校を出ると、教師は厭いやだから文学を職業とする云ひ出して、他の
ものゝ留めるにも拘かわらず、危険な商売をやり始めた。やり始めてか
ら三年になるが、未だに名声も上あらず、窮き々云つて原稿生活を持続
してゐる。」とあり、文学は「危険な商売」である。どのように危険な

のか、つまり浮いた稼業で、まともな人することではないという
意味だろう。代助が行くと寺尾は「頭痛がすると云つて鉢巻はちまきをして、
腕まくりで、帝国文学の原稿を書いて」おり、「今朝から五五、二円
五十銭丈稼いだ」といっているのである。帝国文学は「坊っちゃん」に「赤
ヤツは時々帝国文学とか云ふ真赤な雑誌を学校へ持つて来て難有ありがたさ
うに読んでゐる。」と揶揄的に出て来る。漱石は帝国文学に係わりが
あり、『倫敦塔』などを同誌に発表した。教員が嫌で小説家になつた
漱石だが、原稿用紙を字で埋めてカネを稼がねばならないのは、寺
尾と同様であつた。「何なにしろ食くふんだからね。どうせ真面目まじめな商買
ぢやないさ。」という寺尾の言葉は漱石自身にどのように反響してい
たのだろうか。

寺尾はその後、六月初めとおぼしき頃、翻訳の相談にやつて来た。
代助の気乗りのしない顔を見て、「食くふに困こまらないと思つて、さう
無精ぶせうな顔をしないで好よからう。もう少し判然はんぜんとして呉くれれ。此方こちは
生死せいじの戦たたかひだ」と言う。人を食つたような態度ながら切実で哀れ
でもある。明治大正の文士や書生の多くは翻訳や雑文稼ぎで糊口し
た。それは日本近代の根底を作る仕事でもあつたが、僅かなカネの
ために貴重な頭脳をスポイルすることでもあつた。寺尾の齷齪しよくは日
本近代の齷齪であるとも言える。その寺尾を揶揄冷笑する代助は何
かと言えば、思想思想的には革命的に進歩しているが現実と思索と
の乖離は甚だしいものがある。三千代に愛を告白した後の七月下旬
に寺尾はまたやつて来た。

代助は思ひ切つて寺尾に逢つた。寺尾は何時いつもの様に、血眼ちまなこ
になつて、何かを探さがしてゐた。代助は其様子を見て、例の如く
皮肉で持ち切る気にもなれなかつた。翻訳だらうが焼き直した
らうが、生きてゐるうちは何処どこ迄も遣やる覚悟だから、寺尾の方

がまだ社会の児らしく見えた。自分がもし失脚して、彼と同様の地位に置かれたら、果して何の位の仕事に堪えるだらうと思ふと、代助は自分に対して気の毒になつた。(十五の三)

右の如く代助は自分が「社会の児」ではないことを寺尾によつて知ることになる。同時に「今の所謂文壇が、あゝ云ふ人格を必要と認めて、自然に産み出した程、今の文壇は悲しむべき状況の下に呻吟してゐるのではなからうかと考へて茫乎した」とあるように、明治末期の文壇を貶損してもいる。代助の立ち位置についてはこれから検討することにして、漱石は前述した多忙を極める教員や田舎に埋もれた友人と同様に、寺尾のような人物を登場させ、当時のインテリの哀れむべき現実を戯画化して見せた。これは代助のように理想を追求する人間の反措定であり、漱石の現実認識の一端でもあらう。『それから』一編はカネによつて縛られる社会組織の低級さといつた認識の下で、漱石がそのような低級俗悪な世の中への対決姿勢を打ち出そうとした小説という見方もできよう。「もし筆を執つて寺尾の真似さへ出来なかつたら、彼は当然餓死すべきである。もし筆を執らなかつたら、彼は何をやる能力があるだらう。」という一節を書いた時、漱石はわが身を顧みることがなかつたであらうか。

さて、前に戻つて平岡と代助の働く・働かない論議を検討する。平岡は酔つて口が滑らかになつた。

「僕は失敗したさ。けれども失敗しても働らいてゐる。又是からも働らく積だ。君は僕の失敗したのを見て笑つてゐる。」に始まる平岡の代助批判は肯綮に中るもので、「君は世の中を、有の儘で受け取る男だ。言葉を換えて云ふと、意志を發展させる事の出来ない男だらう。意志がないと云ふのは嘘だ。人間だもの。僕は僕の意志を現実社会に働き掛けて、其現実社会が、僕の意志の為に、幾分でも、

僕の思ひ通りになつたと云ふ確証を握らなくつちや、生きてゐられないね。そこに僕と云ふものゝ存在の価値を認めるんだ。君はたゞ考へてゐる。考へてる丈だから、頭の中の世界と、頭の外の世界を別々に建立して生きてゐる。此大不調和を忍んでゐる所が、既に無形の大失敗ぢやないか。何故と云つて見給へ。僕のは其不調和を外へ出した迄で、君のは内に押し込んで置く丈の話だから、外面に押し掛けた丈、僕の方が本当の失敗の度は少ないかも知れない。」という平岡の意見は、代助に対する存在論的批判になつてゐる。代助は世の中を批判するが、その批判する世の中に浸り切つた自分を全く批判しない、「大不調和を忍んでゐる」即ち自己矛盾の塊である。それを指摘する平岡は活動派で、代助は批評家を気取つてゐるが自己の世界に閉じこもる若隠居であらう。こう考えると『それから』は現実派の平岡が夢想家代助を教化して現実世界に引きずり出そうとする小説でもある。その結果するところは代助の自滅であつた。

次に働く・働かない論議となるが、少し注意すべきは明治時代の帝大卒業者が働くという場合、現代の所謂就職などとは違い、天下国家に関わるといつた気構えが多少とも含まれていたのである。代助も平岡もそれは程度の差はあれ、あると見てよからう。平岡の攻撃に対して代助は「攻撃される通り僕は働らかない積だから黙つてゐた。」(六の七)と言ひ、働かない弁明を行う。

「何故働かないつて、そりや僕が悪いんぢやない。つまり世の中が悪いのだ。もつと大袈裟に云ふと、日本対西洋の關係が駄目だから働かないのだ。」という代助の理屈は奇妙だが、日本が西欧化して益々悪くなつて行く。賃金奴隷のような世の中が出来している。だから自分の働く場はないといつた理屈だと思われる。「精神の困憊と、身体の衰弱とは不幸にして伴なつてゐる。のみならず、道徳の

敗退も一所に来てゐる。日本国中何所を見渡したつて、輝いてる断面は一寸四方も無いぢやないか。悉く暗黒だ。其間に立つて僕一人が、何と云つたつて、何を為したつて、仕様がなき。」というように「歐洲から押し寄せた海嘯」(九の一)に飲まれた日本は、すべてが劣化していると言う。その中で代助一人が超然としていられるのかという問題もあるが、そこにパラサイトしている自分も劣化した日本の一部だと知るべきではなかったか。それは措くとして、このような代助の認識は漱石のロンドン体験が元になつていようである。漱石は明治三十五年三月一五日付のロンドンから中根重一宛の書簡で、「歐洲今日文明の失敗は明かに貧富の懸隔甚しきに基因致候此不平均は幾多有為の人材を年々餓死せしめ凍死せしめ若くは無教育に終らしめ却つて平凡なる金持をして愚なる主張を實行せしめる傾なくやと存候(中略)日本にて之と同様の境遇に向ひ候はゞ(現に向ひつゝあると存じ候)かの土方人足の智識文字の發達する未來に於ては由々しき大事と存候 カールマルクスの所論の如きは単に純粹の理窟としても欠点有之べくとは存候へども今日の世界に此説の出づるは当然の事と存候」云々とあり、漱石の蔵書にはMarxのCapitalがある(1902年の英語版)。漱石はマルクスの理論には共感出来なかつたにしろ、貧富の差や金によって人間の運命がすべて支配されるがごとき西欧文明・イギリス社会に恐怖や嫌悪を抱いていたことは間違いない。イギリスから帰国して、自分の家族や鏡子夫人の実家が貧に窮し、漱石自身猛烈に稼ぐ必要に迫られたとき、漱石の心内にカネが支配する世の中に大いなる憎悪や恐怖が植え付けられたであろう。しかしマルクスが疎外労働や剰余価値を理論化したのとは違い、漱石の判断基準は主に「道德の敗退」といった、人心の有り様に置かれるのが特徴であつた。それは後述する日本の社会

主義者や無政府主義者も似る所があつた。

代助の自説に対し、平岡は「僕見た様に局部に當つて、現実と悪闘してゐるものは、そんな事を考へる余地がない。」と言ひ、「君は金に不自由しないから不可ない。生活に困らないから、働らく気にならないんだ。要するに坊ちやんだから、品の好い様なこと許かり云つてゐて、——と代助の最も痛いところを衝いたのであるが、それへの反論は空論であつてもマルクス主義や共產主義理論の究極の理想論に近いものである。それは労働と芸術活動とが等しくなるような究極の自由の実現といつたもので、このような事を明治四二年に考えただけでも代助の頭脳は革命的に進歩していたと言わざるを得ない。代助は「働らくのも可い、働らくなら、生活以上の働でなくつちや名譽にならない。あらゆる神聖な労力は、みんな麴麴を離れてゐると言ひ、「食ふ為めの職業は、誠実にや出来悪い」と言う。平岡は食う為だから猛烈に働くのだと反論するが、代助はそれは「墮落の労力だ」と言ひ、最後には「だからさ。衣食に不自由のない人が、云はゞ、物数奇にやる働らきでなくつちや、真面目な仕事は出来るものぢやないんだよ」との結論に達した。麴麴を得るための労働は、労働自体が目的ではないから墮落した劣等なものである、気楽に好きな時に好きなようにする仕事こそ真の高級な仕事であるという理屈である。それは衣食の心配のない人の芸術活動や漱石の理想とした陶淵明の田園生活などには実現されるかもしれないが、現実にはそのような自由な労働形態は空想の中にしかあり得ないものである。しかし、代助の神聖労働観は空論とは言え、明治日本貧弱な実態を考える時、驚くべき進歩的なものと言えよう。マルクスは『資本論』の中で「じつさい、自由の国は、窮乏や外的な合目的性に迫られて労働するということがなくなつたときに、はじめ

て始まるのである。つまり、それは、当然のこととして、本来の物質的生産の領域のかなたにあるのである。未開人は自分の欲望を充たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならぬが、同じように文明人もそうしなければならぬのであり、しかもどんな社会形態のなかでも、考えられるかぎりのどんな生産様式のもともでも、そうしなければならぬのである。^③と述べて、そのような労働の必要がなくなった遙か彼方の社会において、「自由の国」が成立するようなことを述べる。それも夢想到過ぎないだろうが、兎も角代助の考え方は、物質的欲求・賃金労働、その社会的現われとしてのカネを媒介にした人間関係と活動を超越した、真の自由といったマルクスの考える究極の理想に似ている。カネの為に働くのではなく、働くことそのものが目的でなければならぬという活動と目的の一致という考えもマルクスの言う人間疎外労働の否定の考えに近いものがある。後になって代助は「だから人間の目的は、生れた本人が、本人自身に作つたものでなければならぬ。」(十一の二)という考えに到達したとして、更に次のように思う。

此根本義から出立した代助は、自己本来の活動を、自己本来の目的としてゐた。歩きたいから歩く。すると歩くのが目的になる。考へたいから考へる。すると考へるのが目的になる。それ以外の目的を以て、歩いたり、考へたりするのは、歩行と思考の墮落になる如く、自己の活動以外に一種の目的を立て、活動するのは活動の墮落になる。従つて自己全体の活動を挙げ、これを方便の具に使用するものは、自ら自己存在の目的を破壊したも同然である。

このような代助の考えは、近代資本主義社会の労働が人間性を奪

うものだというマルクスの所説、所謂人間疎外や労働の外化の考へに類似している。マルクス『経済学・哲学草稿』(「疎外された労働」)で「労働の外化」について「労働が労働者にとつて外的であること、すなわち、労働が労働者の本質に属していないこと、そのため彼は自分の労働において肯定されないでかえつて否定され、幸福と感ぜずにかえつて不幸と感じ、自由な肉体的および精神的エネルギーがまったく発展させられずに、かえつて彼の肉體は消耗し、彼の精神は頹廢化する、ということにある。」^④云々と説いている。これは丁度代助の言うところの自分の活動を「方便の具に使用」したために「自己存在の目的を破壊」することと理論的共通性がある。代助の空論はマルクスの觀念論の相似形と言つてもよいのではないか。問題は明治後期の日本に神聖労働観や労働と目的の合一といった理屈が現実味を持っていたかどうかであろう。

児玉花外の『社会主義詩集』^⑤は、明治三十六年八月に発行される手はずになって、完成していたものが官憲に総て没収されたという。そこには「これらの小詩は吾が宗教とする社会主義の讚美歌にしてまた黄金跋扈の大魔界に対する進軍歌なり」という序詞が付してあった。山口孤劍もまた、明治三十年代後半『週刊平民新聞』や『直言』などに「社会主義の歌」などを発表した。明治四十年三月に石川三四郎とともに筆禍により逮捕された。四十一年六月二十二日、神田錦輝館の赤旗事件は孤劍の出獄歓迎会がもとであった。赤旗事件では荒畑寒村や菅野スガも逮捕された。このように社会主義・無政府主義の運動が起りつつあったが、社会秩序を乱すとして弾圧された。『それから』には幸徳秋水の名が出て来るわけだが、この小説が赤旗事件と大逆事件の狭間に書かれたことは重要な意味を持つのではないだろうか。殆どの国民は「黄金跋扈の大魔界」の下で苦しんでいた

ので、代助の理想とする「歩きたいから歩く」主義のような気楽な境地は夢の夢であつたと思われる。麵麴の為の働きは墮落した働きだと言つて、その主義を實行出来る人は明治後期には『白樺』派のような特権階級を除いてほとんど存在しなかつたのではないか。漱石は自らもやはりカネに煩わされ、カネのために道義が頽廢したと観じた故に、昔あつたかもしれない桃源郷か、または遠い未来にあるかもしれない究極の自由社会を代助に夢想させたのであろう。しかしその夢想する自由も親のカネに頼つた上でのことであり、結局代助も麵麴の為の労働を肯んじざるを得なくなる。

坂本育雄は、次のように述べる。

漱石は、一生を通じて富、即ち金力に対立した人である。しかし富が膨張して「余財」を作らなければ、文学などという「贅沢な職業」が成り立たないことも十分に理解していた〔戦後文界の趨勢「明治38・8『新小説』」〕。戦争に勝つたことで富が膨張し、その「余財」が文学をも隆盛に導くとしても、文学はかかる富の膨張を否定的に捉えざるを得ぬ。漱石文学がかかるものとしてあるとするなら、この矛盾を個人に移せば、代助という高等遊民が生ずるのである。すべての知識人の現実批判には多かれ少なかれこのような矛盾のパターンが横たわっているであろう。⁶⁾

坂本は右のように述べてさらに日露戦争後の世相によつて高等かどうかは別にして遊民が現実的意味を持つことは否定できないと言ふ。『白樺』や正宗白鳥、広津和郎などの小説にその傾向があることは確かであろう。しかし代助は『何処へ』の菅沼健次とは違い、虚無的な青年ではない。何もしないことに積極的な理由を見出した青年である。坂本は日露戦争後の不況と虚脱感を挙げて次のように言

う。

遊民の現実的基盤は右に瞥見した通りだが、高等遊民としての代助は、働こうにも働き口のない人間としてではなく、働かないことに積極的意義を見出そうとする人種として描かれている。なぜ働かないのか、について代助の挙げた理由は二つある。

一つは「世の中が悪い」(六〇)からであり、その世の中がどう悪いかについての分析は実に見事に展開されている。今一つは、主人持ちの労働が労働(仕事)を主としてみた時には、労働の墮落を招来する点にある。信長とその料理人の例で明かなので明らかなように、生きるためには自己の良心を犠牲にしなければならぬのが現代社会の宮仕えの宿命だからである。現代の社会制度下では、労働の質が働く人々の人間性を豊かに開花させる仕組みになっていないばかりか、資本の論理に従つて、逆に人間性を磨滅せしめる以外に生きる術がない以上、代助の論理そのものは飽くまで正しいのであり、その限りで今日の読者の共感を呼ぶ事実は否定できない。(中略)

思えば、漱石程高等遊民から遠い存在はなかつた。にも拘らず、くり返し高等遊民的存在をその小説の主人公に仕立てたのはなぜか。それは昨日今日考へついたものではなく、彼の全生涯を賭けた現実と彼との關係を示す集約点なのであり、すでに彼の人生の出発点から抱えた課題の永続的な追求がそこに関わっていたのである。

右の所論には聞くべき点が多い。代助は「世の中が悪い」と言うものの、その世の中に直接働きかける行動はしなかつた。しかし漱石の視線は世の中をいろいろな角度から捉えていて、世の中が悪いからといって傍観者として高みの見物をし、それで事足りりとしたの

ではない。それが代助と平岡の二人の、言わば弁証法的関係として現れたのではないか。思索者代助と行動者平岡の対照、それはいかに止揚されるのか。

その問題を考える際重要な点は、この小説の背後に広がる時代状況を示唆する、小説後半で平岡の語る幸徳秋水の存在、そして直接語られはしないが幸徳に連なる平民社関係の人々などではなからうか。それは、明治国家が目指した西欧並みの一等国という目標の下で呻吟する大多数の貧弱な国民の苦悶の声を代弁するものであろう。漱石は平岡と代助を配役に仕立てたが、他方に秋水のような動きがあることも承知しており、しかもそうした運動に無理と限界があることも悟っていたのではないだろうか。

さて代助は新聞社を訪ね、平岡と待合に入って話した。幸徳秋水のことが新聞に載ったのは六月七、八日のことであるから、その頃の事と一応考えられる。

平岡はそれから、幸徳秋水と云ふ社会主義の人を、政府がどんなに恐れてゐるかと云ふ事を話した。幸徳秋水の家の前と後に巡査が二三人宛晝夜張番をしてゐる。一時は天幕を張つて、其中から覗つてゐた。秋水が外出すると、巡査が後を付ける。万が一見失ひでもしやうものなら非常な事件になる。今本郷に現はれた、今神田へ来たとき、夫から夫へと電話が掛つて東京市中大騒ぎである。

平岡は幸徳騒ぎを「現代的滑稽の標本」と言う。要するに秋水一人のために政府が大騒ぎする、それほど日本の体制は脆弱で、また秋水の言説は社会の欠陥を衝くもので、従つて人心収攬される可能性があると云いたいのだろう。だから平岡はそのような脆弱未熟で欠陥だらけの日本に代助のような高遠高邁な理想論など無用だと言

いたいのであろう。

実際代助の日本社会の洞察は辛辣で正鵠を得ている。代助は平岡との離反を契機に「現代の社会は孤立した人間の集合体に過ぎなかつた。大地は自然に続いてゐるけれども、其上に家を建てたら、忽ち切れ／＼になつて仕舞つた。家の中にある人間も亦切れ切れになつて仕舞つた。文明は我等をして孤立せしむるものだ、代助は解釈した。」(八の六)という文明観を感懐した。道徳の敗退と人の孤立という社会学で言う「共同態の崩壊」といった事態は漱石の抱く近代社会観であり、小説の大きなテーマになっていると思われる。『それから』においてもそれらは随所に代助の感懐として表明されている。西欧化した近代国家の中では中世的な中間集団に見られる共同態的な紐帯は消滅し、人は個人化し、それを繋ぐものはカネということになる。後に漱石は「私の個人主義」(大正3・11・25)の講演で「道義上の個人主義」と述べたし、鷗外は『青年』で「利他的個人主義」と言った。いずれも西欧近代社会の発展による個人主義の成立といった理解がなかつたために、「道義」や「利他」という個人主義とは無縁の理念を無理に組み合わせた。柳父章が「individual」ということは、当時の日本人にとつて、とても分りにくい意味のことばであった。それは、societyということばが分りにくかつたのと、本質的に同様である。」と述べているが、個人という言葉を造語し、さらにprincipleの訳語と思われる主義を合わせた個人主義という言葉は謎めいた言葉であつたに違ひなく、個人が未成立なまま中間集団が消滅したために偏頗な近代明治が出来上がったもので、「道義上の個人主義」も「利他的個人主義」ともに封建的な近代人としても言ふべき形容矛盾に近い。明治という時代は近代化しながら復古した、宗教改革と市民革命なき近代であつたので、相矛盾するベクトルの

中でどうすればよいのか、漱石にも代助にも難しい問題であった。

人の切れ切れになつた状態は不自然で、人はやはり集団になるべきだと考えたのは秋水を初めとする社会主義者や無政府主義者であった。

石川三四郎『虚無の靈光』¹²は石川が明治四十年から四十一年に獄中で執筆し翌年発行の前に押収されたため公にされなかつた書で、漱石とは直接つながらないが、同時代の幸徳・大杉らに通ずる思想として意味があると思われる。同書の「第七 社会と個人」の中で石川は、『二人ともに寝れば温暖なり、一人なれば争で温暖ならんや』(伝道の書、四章十一)とか『人は社会的動物にして其天性として自然に社会を形成するものなり』(アリストテレス)とかの言葉を挙げて次のように言う。

『二人ともに寝れば温暖なり』とは何人も実験する所の事実である。『此二人』の温暖は、実に社会の生命である。此温暖なければ、社会は直ちに死滅に帰するであらう。換言すれば、二人が一人に優りて温暖なるは、是れ実に人々相結合するが自然の運命なることを示すものである。古代ギリシアの大哲アリストテレスは、『人間は先づ自然に家族をなし、次で村落を成し、遂に国家を形成するに至る、蓋し人間は社会的動物にして其天性として自然に社会を成すものなり』と言ふて居るが、今日の多くの学者も尚ほ之を以て不動の真理として尊重して居る様である。

このように石川は人間結合は自然であると言ひ、社会と個人との関係には古くから二種類あつて、それは社会主義と個人主義である。極端な社会主義では人は社会に絶対に服従しなければならぬ。個人主義の極端なものは、自分が絶対に他の権威は一切認めないもの

である。前者は「強制的共産主義」で後者は「個人的無政府主義」といふ。その中間に二派の主義があつて、「一は社会民主主義であつて、他は無政府共産主義である。社会民主主義は強制的社会権力を是認しながら、其権力を構成するに就て極めて自由なる、平等なる方法を設けやうとするのである。之に反して無政府共産主義は、人の社会的生活に赴くは是れ自然の帰趣なれば、其共産制を樹立すべきは勿論なれど、然も強制的権力を用ゐるの必要なし、須らく各個人の発意によりて自由なる共産社会を設くるに如かずと言ふに在る。」と述べる。石川三四郎の言説は『それから』に直接の関係はないが、明治四十年前後にこのような言説が行われんとしていたことを考慮すれば、漱石の作意もまた社会と人間の関係にあり、代助と平岡それぞれ主張と世の中との関わり方を通して社会と人のあるべき姿を模索したものであると言つてよいのではないか。

また幸徳秋水は漱石がロンドン滞在中の論文集『長舌』(明治35・2)の「金銭を廃止せよ(社会主義の理想)」で「病菌が人の血液に混じて、漸時に肉体を侵蝕するが如く、金銭てふ者が世間に対して無限万能の勢力を有する以上は、世道は益々沈淪し行く可し、風俗は益々壞類に赴く可し、人心は益々腐敗に向かふ可し、而して社会は遂に亡滅に至らざる已まず、(略)換言すれば世間に金銭の必要を廃止せしむるに非ざるよりは、決して世道人心を維持する事は得可からざる也、」と言ひ、また「理想なき国民」の項で「我日本が過去五十年間、振古未曾有の進歩を為せる所以の者は、実に我国民が遠大崇高の主義理想を持して、一に其指導に随つて、勇猛精進不退転なるが為なりき(略)見よ今や天下を挙げて、永遠の理想なくして唯だ眼前の肉慾あるのみ、崇高の主義あるなくして唯だ卑陋なる利益あるのみ、是非を見るなくして利害を見るのみ、道義を見るなくし

て金銭を見るのみ云々と述べた。秋水の社会批判は代助が作中でしばしば吐露する感懐にほぼ重なる。寺尾も平岡もカネのために自己を損壊しているように見えるし、代助の父親は封建道徳を隠れ蓑にして私利を追求し、代助の縁談まで利用しようとする。先に引用したが代助は、秋水の指摘するような社会的墮落を「近來急に膨脹した生活慾の高圧力が道義慾の崩壊を促したものと解釈して」(九の「生活慾」と「道義慾」について次のように思う。

この二つの因数は、何処かで平衡を得なければならない。けれども、貧弱な日本が、歐洲の最強国と、財力に於て肩を較べる日の来る迄は、此平衡は日本に於て得られないものと代助は信じてゐた。さうして、斯る日は、到底日本の上を照らさないものと諦めてゐた。だからこの窮地に陥つた日本紳士の多数は、日毎に法律に触れない程度に於て、もしくはたゞ頭の中に於て、罪惡を犯さなければならぬ。さうして、相手は今如何なる罪惡を犯しつゝあるかを、互に黙知しつゝ、談笑しなければならぬ。代助は人類の一人として、かゝる侮辱を加ふるにも、又加へらるゝにも堪へなかつた。

生活慾を十分満たすほどに日本が豊かになれば、言い換えると日本人が当時の英國のごとくカネ持ちになれば適度に道徳的にもなれるが、そうでないから口では体裁のいいことを言つて、腹の中では人を騙したり出し抜いたりして自分の利益を得ようとする。そのような浅ましい国が日本であるというのであるが、これは秋水の社会批判によく似ている。要するにカネのために道義が廢れたことを批判するのである。

また、『それから』の掲載の前年、赤旗事件の直後の明治四十一年七月、幸徳秋水は郷里土佐で『麵麩の略取』(THE CONQUEST

OF BREAD BY PETER KROPOTKIN)の翻訳を終え、上京した。

そして翌年一月に平民社刊・訳で届けられ発禁になった。しかし明治四十一年に一部を大杉栄他が『日本平民新聞』などに載せていて、『麵麩の略取』は少なからぬ影響を明治青年に与えたという。前述の如く代助は度々『麵麩』という言葉を用いる。『それから』と『麵麩の略取』とに直接の關係はないかもしれないが、麵麩という用語、そしてクロポトキンの思想はいろいろ示唆的である。「第九章 贅沢の要求 其一」でクロポトキンは、「左れど人間は、食ふ、飲む、自分の住居を作ることばかりを、其一生の目的とする者ではない、其物質的欠乏が満足するゝや否や、直ちに他の技巧的性質の欲求は一層熱烈に突出して来る、人生の目的は各人個々皆な異なつて居る、社会が愈々文明なれば個性は愈々發達する、而して欲望の種類は愈々多くなる。」と述べて、麵麩の要求だけが全てではないと説く。即ち「吾人が一個の社会的革命を希望する所以は、無論第一着は万人に麵麩を与へるに在る、此呪詛すべき社会を變革するに在る、強壯なる労働者は、彼等を掠奪する雇主の慾望の爲めに仕事を得不いで居る、婦女や小兒は夜も宿る所なくて漂泊ふて居る、全家族は乾からびた麵麩で辛く命を繋いで居る、男も女も小兒も、看護の不足の爲めに、甚しきは食物の欠乏の爲めに死しつゝある、是れ吾人が日々見受る所である、吾人が叛乱する所以は、実に斯る不公を禁絶せんが爲めである。」というものの、それだけではない。

而も吾人が革命に向つて期待する所は、之だけではない、吾人は見る、今日の労働者は苦痛なる生存競争に駆られて、彼の科学、殊に科学的發見の如き、彼の芸術、殊に芸術上の創作の如き高尚なる娯樂、人間の達し得べき最高の娯樂に就ては、全く無智にせられて居る、社会革命で万人に日々の麵麩を保証せね

ばならぬ所以は、実に今日少数者のみの専有して居る斯る娯楽を万人に供せん為めである、精神的才能を發達し得べき余力と、間暇とを与へんか為めである、麵麩にして確保されたる後は、間暇は至上の目的である。

今日の如く幾百千の人類が麵麩、石炭、衣服、宿所にさへ窮せる時に於ては、贅沢は無論罪悪である、其を満足するには、労働者の子の麵麩を無くせねばならぬ！ 左れど万人が十分に食ふことの出来る社会に於ては、今日贅沢と思ふものも、切に其必要を感じずるに違ひない、而して万人は皆な一樣でなく、又一樣には出来もせぬので（嗜好と欲求の相異は、人類の主なる保証である）、或特殊の方面に於ける欲望の、遙かに尋常人に超ゆる男女が、断えず出て来ることであらう、又出て来るのは望ましいことである。

このように述べてクロボトキンは農民も含め皆芸術的欲求を持つて当然であり、「上等のピアノより外に何も要らぬ」という人が居てもよい云々と説く。無論それは夢想に過ぎないのであるが、代助が麵麩の為の労働を否定し、働かずに絵や音楽の趣味を樂しみ、麵麩よりも芸術を尊重し「もし馬鈴薯が金剛石より大切になつたら、人間はもう駄目であると、代助は平生から考へてゐた。」（十三の二）というのと相似する。クロボトキンの所説は遙か彼方の桃源郷の空想であり、代助のは親や兄夫婦からのカネが頼りのパラサイトの高尚高慢に過ぎないという遠近法的相似形なのである。だから今の引用の後は「向後父の怒に觸れて、万一金錢上の關係が絶えるとすれば、彼は厭でも金剛石を放り出して、馬鈴薯に嚙り付かなければならない。さうして其償には自然の愛が残る丈である。其愛の対象は他人の細君である。」ということになるのである。

3

そこで三千代、愛、自然とは何かという問題が見えてくるが、その問題はこれまで述べたような明治末の社会で平岡、代助、父といったそれぞれの立場の人々がどのように生き得るのかといった問題でもある。関谷由美子は「代助はまさしくあるタイプとしてではなく、何事かが起こる〈場〉として、その〈意識の全貌の写生〉が目論まれている〈受動態〉としての人間である。（中略）『それから』の叙述の方針は、生の、あるいは時間の持続によつて何事かが生起する〈場〉として、代助の意識を叙述上の関心の中心に起き、密着し俯瞰し〈矛盾を含む全性格〉を描き尽くそうとする。」と論ずるが、『それから』は〈場〉の小説即ち状況小説で、大状況と小状況からの必然形として結論が導かれるような小説で、代助と三千代の関係もほぼ直線的に数か月の間に進展してしまふ。

代助と三千代とを結ぶのは『三四郎』と同様にカネであつた。「少し御金の工面が出来なくつて？」（四の五）と三千代は上京早々に代助にカネを借りに来て、代助はそのカネを兄に借りに行くというカネの連鎖である。三四郎が与次郎にカネを貸し、その分を里見美禰子から借りるといふ連鎖と同じである。その後も度々、代助は三千代にカネを貸す。カネの力で人妻を籠絡するというわけではないが、カネによつて二人が接近したのは確かである。三千代とは何か、菅沼という友人の妹で大学時代に知り合つた。しかし菅沼と母親は病死し、代助が周旋して平岡と結婚した女である。子供を産んだがすぐに死んだ。三千代の父親は現在北海道で哀れな生活を送つていた。なぜ北海道にいるかという次のような事情である。

三千代の父はかつて多少の財産と称へらるべき田畠の所有者であつた。日露戦争の当時、人の勸に応じて、株に手を出して全く遣り損なつてから、潔く祖先の地を売り払つて、北海道へ渡つたのである。其後の消息は、代助も今此手紙を見せられる迄一向知らなかつた。親類あれども無きが如しだとは三千代の兄が生きてゐる時分よく代助に語つた言葉であつた。果して三千代は、父と平岡ばかりを便に生きてゐた。(十三の四)

右の諸事情は鏡子の父親中根重一の経歴に倣つたのは明らかであるが、すると三千代が上京して間もなく父親は破産し、菅沼と母親が死んだ時には既に北海道に出稼ぎに行つていたものと考えられる。三千代への手紙には「東京の方へ出たいが都合はつくまいかと云ふ事や、——凡て憐れな事ばかり書いてあつた。」のである。かくて三千代は親や親戚には頼れず子供もおらず、夫は失業し、持病の心臓病を患つてゐるという最低レベルの生存を甘受せざるを得ない女である。同情以外の感情でこうした女に接近する者があるだろうか。しかも十数年来の親友の妻である。それは今まで見たように代助は父の住む世界にも平岡の住む世界にも積極的に参加できない、即ちカネの世の中に積極的に関わる事が出来ない人間であり、カネ的な世界の住人になることをどうしても肯定出来ない。そのような人間である代助は平岡によつて世の中にコミットすることを煽動されるわけだが、父から勧められる縁談も相俟つて結局逆煽動的に世の中から脱落する道に進むことを選択する、それが三千代への愛の本質だと言つてもよからう。だからその相手としては無であるような三千代しかなかつた。三千代と代助は、石川三四郎の言う二人の温煖即ち人の自然的な結合を回復すべく結ばれんとするが、それは三千代の死病と代助の狂的破壊に於いて成功するしかなかつた。即ち

世の中の一員であることを放棄断念する、それは原始的無政府主義、若しくは陶淵明の田園回帰的現世厭離志向に近く、三千代は代助のその志向の道連れになることを予め定められていたと考えられる。それが『それから』における「自然」の本質であろう。『それから』は一つの予定調和的世界を成しており、代助の前に平岡と三千代が出現する事が分かつた時から、平岡のカネ的世界(陽画)と代助の非カネ的世界(陰画)は三千代の無の世界に止揚されるのである。従つて代助が逆に三千代の道連れにされたとも言える。漱石文学に描かれる女はやや典型的だが、概して男の友情ユートピアを破壊する癌的な存在として現れる。男達のホモジニアスな共同態も近代学校制度の齎した擬似的な共同態(サロン)で、少数の特権的知識人の共同態は封建社会の中間集団などとは違つて国家の中枢を担う支配階層の予備軍的存在であり、帝国大学を頂点とした学歴社会ヒエラルキーの一翼であつた。それを壊すものがオンナであるとも言える。代助が自然に帰る過程を考えると、まず三年前の「渡金」的自分からやがて「真鍮」でいいのだと悟つた段階があつたわけだが、此の度の第一段階は、代助の神聖労働観などの空論からカネが支配する普通社会への回帰(寺尾のような「社会の児」、次いで第二段階として制度の埒外へ脱落する無政府主義的飛躍(「自然の児」という、二段階の過程を踏むものである)。

三千代については「リリー、オフ、ゼ、ワレーの漬けてある鉢」の水を飲む場面がある(十の四)。代助はそれを知つて「果して詩の爲に鉢の水を呑んだのか、又は生理上の作用に促がされて飲んだのか、追窮する勇氣も出なかつた。」という。三千代の捨て身の勇氣に驚嘆したのであるがこのように三千代は通常人を逸脱した女として設定されている。また、代助の告白を聞いた後、三千代は「仕様が

ない。覚悟を決めませう」(十四の十一)と言う。そして泣きながら「彼等は愛の刑と愛の資」とを味わったという。次に会った時、三千代は再び「覚悟」という言葉を用いて「若も事があれば、死ぬ積で覚悟を極めてゐるんですもの」(十六の三)と言い、「漂泊」してもいいとも言う。これは少し前の代助の述懐、「凡ての職業を見渡した後、彼の眼は漂泊者の上に来て、そこで留まった。彼は明らかに自分の影を、犬と人の境を迷う乞食の群の中に見出した。」云々(十六の一)に対応している訳で、代助も三千代も死ぬか漂泊者に落ちぶれるかといった身の破滅を「覚悟」している。江戸時代の道行きにも通ずるこうした捨て鉢な決意は言葉の上だけなのだろうか。有夫姦で姦通罪に問われかねないにせよ、あまりに自暴自棄というか常軌逸脱の恋愛である。代助や三千代はそんなに激高型の人間だったのか、代助はニルアドミラリの青年ではなかったか。とするとやはりこれはアナキー志向ではないのか。これは代助における「自然」を見ても同様である。

平岡に物質社会での敗残や結婚生活の索漠を強いたのは、半ばは代助の鍍金精神で、代助は父親の鍍金精神を受け売りしていたにもかかわらず、三年経った今は鍍金精神の虚偽に気付いていた。そこへ三千代の出現によって代助は自分も鍍金の生活を打破し、普通並みの人間の「自然」すなわちカネで結ばれる人間関係こそ自分自身の本質だったという認識に薄々気づかされるといふ訳だ。やがて代助は三千代に求愛する。しかしそれは「自然」という言葉を梃子にした、「僕の存在にはあなたが必要だ」という自分の存在論であった。ある意味で平岡に煽動された代助は、三千代を引き受けようと試みることで、平岡の失敗を身をもってかぶり、三千代とともに滅びようとするのだとも見られる。

自然の兎にならうか、又意志の人にならうかと代助は迷った。(十四の一)

「今日始めて自然の昔に帰るんだ」と胸の中で云った。斯う云ひ得た時、彼は年頃になく慰を総身に覚えた。何故もつと早く帰る事が出来なかつたのかと思つた。始から何故自然に抵抗したのかと思つた。彼は雨の中に、百合の中に、再現の昔のなかに、純一無雜に平和な生命を見出した。其生命の裏にも表にも、慾得はなかつた、利害はなかつた、自己を圧迫する道徳はなかつた。雲のやうな自由と、水の如き自然とがあつた。さうして凡てが幸であつた。だから凡てが美しかつた。(十四の七)

この一説は『それから』の中でもよく知られるところで、美しい文章であるともいえるが友人の妻を奪うとする男の思考内容としては余りに現実離れしている。ここでは三千代という女は既に生身の肉体ではなく、「雲のやうな自由」云々の観念、または夢想そのものではない。

「自然の昔に帰る」という唐突不可解な言葉を考える時、高山樗牛の『美的生活』(『太陽』明治34年8月)を少々考慮してもよいように思う。樗牛は「赤児の其母を慕ふは人性自然の本能に本づく、彼等の行為亦是の如しとせば、畢竟其の道徳的価値に於て欠くる所ありと断ぜざるべからず。」(二)と述べて、「人性自然の本能」にこそ価値があり、道徳や理性や知識などは価値がないと言う。樗牛の思想は『それから』とは直接繋がらないようだが、『それから』には森田草平の『煤烟』やその元になるダナンツイオが話柄となつている。『死の勝利』は官能の満足のために死を選ぶ男女の物語であり、樗牛「美的生活」に近いものがある。代助と三千代の「愛」は官能満足ではないが、漱石が模索した自然回帰の「愛」の実体は樗牛やダナンツイオや

『煤烟』に近いものがあるとも考えられる。樗牛は言う。

道德と理性とは、人類を下等動物より區別する所の重もなる特質也。然れども吾人に最大の幸福を与へ得るものは是の兩者に非ずして実は本能なることを知らざるべからず。蓋し人類は其の本然の性質に於て下等動物と多く異なるものに非ず。世の道学先生の説くところ、理義如何に高く、言辭如何に妙なるも、若し彼等をして其の中心の所信を赤裸々に告白するの勇氣にあらしめむか、必ずや人生の至樂は畢竟性慾の満足に存することを認むるならむ。吾人に知識の慾ありて真理を悟らむことを欲し、道義の念ありて善徳を修めむことを望む。是等の欲望の到達せられたる処に一種の快樂あるや素より論無し。然れども是の種の快樂や極めて淡く、極めて軽く、其力到底人性の要求を満足するに足らざるを如何せむ。まことに高尚深遠なるらしき幾多の文字は、是の種の快樂の讚美に使用せらると雖も、吾人をして忌憚なく言はしむれば、是れ一種の偽善に過ぎざるのみ。(中略)勉学に死し、慈善に狂せるの例は吾人の多く知らざる所なりと雖も、恋愛に対しては人生の価値寧ろ軽きを覚ゆるに非ずや。誤て万物の靈長と称せられてより、人は漸やく其の動物の本性を暴露するを憚り、自ら求めて、もしくは知らず知らず其の本然の要求に反して虚偽の生活を営むに至る。而して吾人の見る所を以てすれば、人類をして茲に到らしめたるものは実に人類をして万物の靈長たらしめたる道德と智識とに外ならず。知らず道德と智識と畢竟何の用ぞ。

樗牛の本能満足はニーチェの流れを汲むと言われるので、所謂西洋キリスト教道德の否定であつて、日本近代への疑念とは次元が異なる。しかし、漱石が長井代助の口を通して日本の西洋化にも同時

に父親らの封建道德の垂流にも同ずることが出来ないと言ひ、最終的に「自然」に従うという時、その「自然」は樗牛の言う「人性自然の本能」にかなり近い。要するに社会性の否定であろう。即ち、金、鍍金、真鍮の比喩や自然に帰るといふ言葉などを勘案すると、近代的社会組織の人間、それは制度と経済力ネによつて人々を結びつけるわけだが、そのようなあり方を否定し、道德的偽善を排して生きようという方向は樗牛に近いものがあるようだ。日本の近代は西歐の圧力による借り物のお仕着せで、金銭万能はその象徴である。それを脱却する方向として漱石は理屈ではない社会性否定の思想を体现せんとしたと言えよう。

4

このように漱石の文学は近代社会の齎した諸制度とりわけ学校に基づく人間関係を中心に展開し、その人間関係の蹉跌破綻といった状態を主な主題にしていることが見えて来る。その破綻のもとには男女の立ち位置や生活の差異などによつて滑稽であつたり詩的であつたり深刻であつたりする。『坊つちやん』『三四郎』『草枕』などもそれらが全国的な学校制度や近代が齎した文明の利器によつて成立していることが分る。『ころ』もまたそうであろう。『それから』は言うまでもなく中学時代からの友人と、大学時代に知り合つた学友たちとその妹の話で、そこに実業家の家族を巻き込んだものであり、明治近代の新しい社会を基礎としている。このように漱石の小説構想の基本が近代社会に基づく人間関係的であり、それを譬えれば社会全体が少し近代化してカネという血液の流れている人体組織にな

ったものが依然として全体は未成熟のために不調和を起こして、頭脳と心と肉体とがそれぞれ反目しあつて悶着を起こしているような状態を体現した小説であると言える。このように漱石はおそらく社会の中の個人を普遍的に描こうとしたために、所謂唯物論的な人間的¹⁶⁾の姿を描くものになつたのではないだろうか。物質的金銭的な状況に支配され使喚される人間たち、そこを逃れようとして心の充足を求めて「恋」に向つても、大状況から逃れられる訳はなく、ついに破滅的にならざるを得ない。『それから』で言えば人格破綻的であることが究極の自由や解放に近く、財産や地位を保全するような行動を忌避し、一般的道徳に逆らつて棄民化することが美しい「自然」なのであるような矛盾した状態である。少し飛躍して考えると漱石の「則天去私」もまたこのような矛盾を孕んだ「自然」ではなかつたのか。

近代以前の人間関係は縦型の固定的なもので、自分から、あるいは偶然的出会いによつて作ることはおそらくあり得ず、身分や出自によつて出生した時から決められていたであらう。また封建社会では、金銭は一定程度流通し機能したとは思われるがカネという抽象的なモノをすべての価値の上位に位置づけ、一切の人間活動をカネに換算するようなことはなかつたものと考えられる。男女関係もほとんど受動的決定的で、男女関係は身分の上下関係に等しかつたと思われる。近代社会に入るとそのような固定的、受動的な人間関係はだんだん希薄になり、逆に個人の境遇能力や意思好悪、偶然の出会いなどいろいろの因果系列の交錯によつて生ずる関係が一人一人の人間の生存を大きく左右するようになる。その主たる要因は学歴・地位、権力、経済力など、おおむね富と権力の複合・相互的力の発現であり、人間本態は極言すれば社会的存在としての人間関係

にあると言えるまでに社会の構造化が進んだ。漱石の文学の一つの側面は、このように人間関係に規定される人間の姿・内面を構成の中心にしているので、関係(構造)＝本体であると言える。これを突き詰めると、生産力生産関係と交通を人間や社会形成の根本に据えた唯物論やマルクス主義と漱石文学は共通の性質を持っているようである。つまり社会的存在様態がその人の本質を形成し、それによつて必然的にある状態が惹起する。そうした近代社会における人間関係すなわち物質的金銭的人間の有り様を、漱石は認められない、嫌悪する。しかし同時に江戸時代の儒教道徳や武士の忠義や自己犠牲にも偽善や欺瞞を感じ取る。そこでそうした西洋物質的近代主義からも武士道の忠義からも超然達観・諦観としていられる場合にはユーモアが生じ、そのような人間関係に絡め取られて出口のない時は、悩み苦しみの堂々巡り若しくは皮肉や冷笑が生ずる。世の中の現実を全くネグレクトしたときは『夢十夜』のような夢物語も出来る。『それから』は『三四郎』を少し引き取つていて、美祢子・三千代という面もある。が、三四郎が与次郎と共に作りかけた友情共同態は美祢子の打算と裏切りの結果、崩れた。そして *straw theop* になつた三四郎は所謂高等遊民代助になり、「世の中」から超然として生きられるのか、が問われたわけだがそれは脆くも崩れた。

父親の勧める縁談が迫つて来るにつれて、代助は自己を疎外するような社会組織から超脱すべく、身近にあるところの自己解放の方便である三千代に対し、逃避的行為の共謀者たらんと働きかけた。それは疎外される者から行為する者への転換ではあつたが、実際は自滅的な妄動でしかなく、自然に帰ることは即ち人性に悖ることであつた。漱石は盛んに「自然」の語を用いたが、それは社会的存在としての人間＝カネで結ばれるような人間関係による社会に対す

る反措定的な表現の言葉が外に見つからなかったために「自然」を多用したのだろう。マルクス主義では人間は私有財産つまりカネから解放されて、最終的に人間は自由になるというが、そのような状態が仮にも実現するとすれば、原始時代への逆行に外なるまい。漱石の「自然」もカネ的な人間関係社会からの解放脱却という意味に捉えられるとすれば、それは空想裡にしか存在しない原始共产制とかアナキズム社会のようなものである。後の『行人』において漱石は、宗教・狂気・死による人間離脱を救いの方途としたが、いずれの道も社会的存在としての人間否定ではないだろうか。漱石の「則天去私」もあるいは同様のカテゴリーで考えてよいのかもしれない。しかし人間はカネ的な人間関係から脱する事は決して出来ず、社会即ち人間関係は日々増殖するばかりであるからそこを逃れるのは不可能であろう。そういった問題を漱石は『門』でさらに追求したが、崖下の家にも安穩はなく、小説の最後に宗助は禪によって悟りを求めるが得られず、五円だけ月給が上がったことで一つの救いを得られた。『こゝろ』で再び漱石はカネと恋の人間関係絵巻を明治の精神という大枠に解き放つてはみたが、結局死滅しか道は見出せない。漱石文学は理想はあるが現実味が乏しい、学者小説の漱石文学はアナキズムの逆ユートピア文学即ち死滅的ユートピアという面が強く打ち出されているようである。

三千代と平岡の出現によって、代助はカネ世界への参入、即ち現実社会に取り込まれそうになる。実は既に取り込まれていたのだが、鍍金的に表面を飾っていた三年前、真鍮でよいと思つた今日の自己、どちらにしてもカネの世界から自由ではないことに強いて目を塞いでいたので、それに気付かないでいた。そのせいで三千代を平岡に周旋し、ある意味ではそのツケが回ってきたのである。三年

の後、真鍮的自己認識に到達した代助は鋭い社会批判や賃金奴隸批判意識を未来の先取りに獲得してはいたが、それは自分の立場を顧みない空想でしかなかった。だから門野やその他下々の貧者たちに対する態度は恵まれた境遇ゆえの優越感とか尊大さであつて、社会的公平意識や謙虚さは窺えなかった。これは漱石の社会観の反映でもあろう。かつての代助は父親の封建道徳や友情の自己犠牲心によって鍍金されていたので、真の自分を見失っていた、言わば二重の鍍金人間であつた。それらを平岡と三千代の出現により、鍍金を剥離していく過程が『それから』であるとも言える。しかし鍍金を剥がして人間がヒトになれるわけではないだろう。そしてカネがなければ鍍金もままならないことを三千代からの無心を梅子や兄から拒否されて代助はうすうす気づきもした。一方、三千代は肉体を投げ出すようにして、代助の鍍金を最終的に剥がすことを迫っているようである。三千代は不貞の破滅をちらつかせて、代助の鍍金を剥離することを誘う女であつて、社会的存在の放棄を誘う契機だと言える。かくて女は大概「自然」への入り口のようなのである。それがなければ、平岡・代助・菅沼は、菅沼が死んでも友情の輪の平穩の中にあつたかもしれない。そこに違和を生ずるのは「自然」の女である三千代の存在であつた。漱石は、社会は欺瞞と虚偽、カネによる道徳的退廃で満ちていると観じた故に「自然」への志向を小説の根底に潜ませ仕組んでいたと言える。それが發揮されるのはアナキ的「自然」に最も近い存在として、社会から拒まれていた三千代に於いてである。三千代をもともと愛していたと思う代助は、愛していたのではなく、自己の運命を破壊すること、つまりカネ的な人間から平岡の人間に、さらにもっと進んで鍍金と人間関係の桎梏を去ってアナキ的「自然」に解放されることを実行したに過ぎない。それが自

然という言葉の表す内容であると思われる。こうして平岡路線と代助路線は弁証法的に止揚されて、結局は三千代の体現する「自然」路線に陥っていく。平岡がどうなるかは『それから』の中ではよく分らないが、友人と妻を失った平岡はやはり裏道の人生を生きざるを得ないだろう。「自然」はこうして見ると非常に反社会的破壊的である。三千代と夫婦になろうとすれば、代助は実は平岡のようにカネに屈服せざるを得ないはずである。そうだとすれば『それから』は、代助が平岡になる話である。しかし代助はそこを通り越して社会的人間即ちカネ的存在を拒否し、アナキーな「自然」を目指してしまった。その辺りを実際の世の中に望見すると、幸徳秋水が菅野スガとともに滅びた姿が見えて来る。秋水と寒村とスガの関係は偶然とはいえ、『それから』に相似しているだろう。

現実的に語るなら、平岡が三千代をそれほど冷酷に処遇したか、代助が三千代を救わねばならぬほど平岡は悪夫であるかというところ、そうは言えない。明治時代の普通の夫婦以上にコミュニケーションしているときえ言えるのではないか。そもそも三千代は学士の妻になつたのは幸福の極みであつたときえ言える。平岡が多少の放蕩をしたとしても明治時代は普通である。『十三夜』の父親の言葉「なれども彼れほどの良人を持つ身のつとめ、区役所がよひの腰弁当が釜の下焚きつけて呉るのは格が違ふ。」が思われる。三千代が「淋しくつて不可ないから、又来て頂戴（十三の五）などと言うのは不貞の欲求か、もしくは「自然」の誘いかであろう。代助は盛んに「愛している」とか「愛の資」とかの言葉を用いるけれども、果して明治時代の夫婦に「愛」はあり得たか、もしくは必要だつたのだろうか。

イロとカネとは、同根同質の欲望で矛盾するものではなく、ヒトの本質的欲求であり、社会的な欲望であるが、代助はカネ的な世俗

の活動を否定し、社会的関係を保持することを拒否しようとする。

また、カネ的な社会活動を封建的儒教的道徳で糊塗するのは、愚昧か偽善であるとする。ところが。そのような自分が父や兄、嫂の庇護のもとで表面的一時的な自由を享受して居るだけで、真の自由とは程遠いと感じると、その破壊的打開策として、三千代との不倫な関係を発展させて、社会的秩序の関係を破壊的に処理する方向へ向かう。漱石はオンナを知らず、型に嵌ったオンナしか描かなかつたが、全体的に男女関係を聖なる危険なゲームのように、男性同士のホモジニアスな人間関係を壊す契機の異物挿入として構想する傾きがある。ホモジニアスな、または秩序だつた人間関係に侵入した異物は癌細胞のような働きをして、ついに周りを破壊する。人間関係の秩序はカネの秩序そのものであるが、漱石はこのカネ的な社会的人間関係から脱出、離脱する方向に進もうというベクトルを持ち続けた。カネの社会秩序を離脱するのは一種の革命であり、幸徳秋水が「金銭を廃止せよ」と言うのといくらか共通する。代助は「薄弱な生活から救」われたいと思つて、三千代に接近するわけで、それによつて社会秩序のなかに嵌め込まれた生活を脱却できるからであり、それは一種の革命である。しかし社会を変革するような革命でなく、自ら進んで世の中の棄民になるような、自己破滅を望む革命なのである。

明治四十一年六月二十二日に赤旗事件が起きて、荒畑寒村や菅野スガらが捕まつた。スガは八月二十九日に釈放され、生活に困つた為、高知から上京し、平民社を立ち上げた秋水のもとに転がり込み同棲し、事実上夫婦になつて、寒村を裏切つた。スガも肺病で余命は知れていた。秋水にも千代という妻がいたので不倫同士の夫婦である。『それから』はこの秋水スガの結婚と大逆事件の間の年に書か

れた。漱石がどの程度、それらの事柄を知っていたか分らないが、代助の口を通して語られる「麵麩」の主張は、秋水らの考えやクロポトキン『麵麩の略取』に近いものがある。『それから』の冒頭は代助がパンにバターを塗って紅茶とともに食べているところから始まる。小説を書き始める漱石の心中に、社会の実相と将来に対する没建設的でどちらかと言えばアナキーな心情が堆積し、それが代助・平岡・三千代のそれぞれの役どころに振り分けられ、やがてそれらの弁証法的止揚の結果、代助の身の破滅と半気違ひ状態に結末したという見方もできるのではなからうか。また漱石が日本近代の現状を深く嫌悪し絶望的になったゆえに、代助の身の上を借りて日本の行く末を暗示して見せたのだとも言えよう。

注

(1) 片田真由美「夏目漱石作品の研究―前期三部作を中心として―」(宮城学院女子大学大学院修士学位論文、平成16・1)に『それから』の作品の設定時期に関する論述がある。その概略を記すと、小節の冒頭に現われる学校騒動、書生の門野の誉める『煤煙』の連載、日糖事件が始まったという新聞記事から小説の時間が明治四十二年であることは明かである。学校騒動は東京高等商業の紛争で明治四十二年二月から五月に起こった。『煤煙』は明治四十二年一月一日から五月十六日、『東京朝日新聞』に連載された。日糖事件は大日本精糖株式会社への贈賄事件で、やはり同年四月十一日から検査が始まり新聞に書かれた。日付については「二の三」に書かれる「ニコライの復活祭」を見行った話が手掛かりになる。これは神田駿河台にあるニコライ堂で行われた復活祭を指すもので、同年四月十一日の漱石日記に「小宮が昨晚エリセフに誘

はれてニコライのイースター祭を見に行く。夜の十二時から始まる由」とあり、小宮豊隆の見聞したことを漱石が作品に取り入れたことが分る。この祭りを「三日目」に見た訳であるから、小説の始まりの日は四月十三日あたりで、代助の家の桜が咲きかけているという記述にも合致する。また修士論文中の、平岡が上京する以前の想定年譜も本論考に際して参照した。

(2) 竹盛天雄「それから」(『國文學』昭和44・4)参照。

(3) 『マルクス・エンゲルス全集』第25巻第2分冊(昭和42年、大月書店)参照。引用箇所は『資本論』第三巻第七篇第八章「三位一体的定式」の一節である。橋本剛「マルクスの人間主義―その根源性と普遍性」(平成19年、窓社)に依れば、「この四八章の標題は「資本―利潤、土地―地代、労働―労賃の」三位一体的定式とされているが、じつはこの章の叙述の全体はひとつつづきのものというよりは、マルクスの遺稿(とどころ読解不明な)からの三つの断片の寄せ集めという形になっており、「自由の国」は「剰余労働」についての叙述が行われている第三番目の断片のなかで、長い補足といった仕方である(つまり、なんの予備的説明をも経ずに語り出されているのである。)とあって、マルクスの遺稿をエンゲルスが挿入したと考えられる。

(4) 『経済学・哲学草稿』は岩波文庫版(昭和39年、岩波書店)参照。

(5) 児玉花外『社会主義詩集』(明治文学全集83『明治社会主義文学集』(一)筑摩書房、昭和40・7)参照。

(6) 坂本育雄「それから」論(『日本近代作家の成立』武蔵野書房、平成11・4、初出『近代日本文学とその周辺』桜楓社、昭和56・6)参照。

(7) 『漱石全集』第六卷(岩波書店、平成6)の注解に『東京朝日新聞』明治42年6月7〜8日に杉村楚人冠「幸徳秋水を襲ふ」の記事があること記載がある。

(8) 作田啓二『個人主義の運命』(岩波書店、昭和56・10)参照。

(9) 「私の個人主義」(大正3年11月25日の学習院での講演)を引用する。(略)あなた方が世間へ出れば、貧民が世の中に立つた時よりも余計権力が使

へるといふ事なのです。前申した、仕事をして何かに掘り中てるまで進んで行くといふ事は、つまりあなたの方の幸福の爲め安心の爲めには相違ありませんが、何故それが幸福と安心とをもたらすかといふと、貴方の方の有つて生れた個性がそこに打つかつて初めて腰がすわるからでせう。さうして其所に尻を落付けて漸々前の方へ進んで行くとその個性が益々発展して行くからでせう。あゝ此所におれの安住の地があつたと、あなたの方の仕事とあなたがたの個性が、しつくり合つた時に、始めて云ひ得るのでせう。

是と同じやうな意味で、今申し上げた権力といふものを吟味して見ると、権力とは先刻お話しした自分の個性を他人の頭の上に無理矢理に押し付ける道具なのです。道具だと判然云ひ切つてゐるならば、そんな道具に使ひ得る利器なのです。

権力に次ぐものは金力です。是も貴方がたは貧民よりも余計に所有して居られるに相違ない。此金力を同じくさうした意味から眺めると、是は個性を拡張するために、他人の上に誘惑の道具として使用し得る至極重宝なものになるのです。

して見ると権力と金力とは自分の個性を貧乏人より余計に、他人の上に押し被せるとか、又は他人を其方面に誘き寄せるとかいふ点に於て、大變便宜な道具だと云はなければなりません。斯ういふ力があるから、偉いやうでゐて、その実非常に危険なのです。先刻申した個性はおもに學問とか文芸とか趣味とかに就いて自己の落ち付くべき所迄行つて始めて發展するやうにお話し致したのですが、実をいふと其応用は甚だ広いもので、單に學芸丈にはとゞまらなものです。(中略、兄弟で、兄が弟に釣りを強制する例え話)

そこで前申した通り自分が好いと思つた事、好きな事、自分の性に合ふ事にそこに打つかつて自分の個性を發展させて行くうちには、自他の區別を忘れて、何うかあいつもおれの仲間引き摺り込んで遣らうといふ氣になる。其時権力があると前云つた兄弟のやうな變な關係が出来上るし、又金力があ

ると、それを振り回して、他を自分のやうなものに仕立上げやうとする。即ち金を誘惑の道具として、其誘惑の力で他を自分の氣に入るやうに変化させやうとする。どつちにしても非常に危険が起るのです。

それで私は常から斯う考へてゐます。第一に貴方がたは自分の個性が發展出来るやうな場所に尻を落ち付けべく、自分とびたりと合つた仕事を發見する迄邁進しなければ一生の不幸である。然し自分がそれ丈の個性を尊重し得るやうに、社会から許されるならば、他人に対しても其個性を認めて、彼等の傾向を尊重するのが理の当然になつて来るでせう。それが必要でかつ正しい事としか私には見えません。(中略)

近頃自我とか自覚とか唱へていくら自分の勝手な真似をして構はないといふ符徴に使ふやうですが、其中には甚だ怪しいのが沢山あります。彼等は自分の自我を飽迄尊重するやうな事を云ひながら、他人の自我に至つては毫も認めてゐないのです。苟しくも公平の眼を具し正義の觀念を有つ以上は、自分の幸福のために自分の個性を發展して行くと同時に、其自由を他にも与へなければ濟まん事だと私は信じて疑はないのです。我々は他が自己の幸福のために、己れの個性を勝手に發展するのを、相当の理由なくして妨害してはならないのであります。(中略)

元來をいふなら、義務の附着して居らない権力といふものが世の中にあらう筈がないのです。(略)

金力に就いても同じ事でありませう。(略)たゞ金を所有してゐる人が、相當の徳義心をもつて、それを道義上害のないやうに使ひこなすより外に、人心の腐敗を防ぐ道はなくなつてしまふのです。(略)

今迄の論旨をかい摘んで見ると、第一に自己の個性の發展を仕遂げやうと思ふならば、同時に他人の個性も尊重しなければならぬといふ事。第二に自己の所有してゐる権力を使用しやうと思ふならば、それに付随してゐる義務といふものを心得なければならぬといふ事。第三に自己の金力を示さう

と願ふなら、それに伴ふ責任を重じなければならぬといふ事。つまり此三ヶ条に帰着するのであります。

是を外の言葉で言ひ直すと、苟しくも倫理的に、ある程度の修養を積んだ人でなければ、個性を発展する価値もなし、権力を使ふ価値もなし、又金力を使ふ価値もないといふ事になるのです。それをもう一遍云ひ換へると、此三者を自由に享け樂しむためには、其三つのものの背後にあるべき人格の支配を受ける必要が起つて来るといふのです。(略)イギリスの例を引く)

それで私は何も英国を手本にするといふ意味ではないのですけれども、要するに義務心を持つてゐない自由は本当の自由ではないと考へます。(略)斯ういふ意味に於て、私は個人主義だと公言して憚らない積です。(略)

斯うした弊害(金力権力の濫用)はみな道義上の個人主義を理解しないから起るので、自分だけを、権力なり金力なりで、一般に推し広めようとする我儘に外ならぬのであります。だから個人主義、私のこゝに述べる個人主義といふものは、決して俗人の考へてゐるやうに国家に危険を及ぼすものでも何でもないので、他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬するといふのが私の解釈なのですからも立派な主義だらうと私は考へてゐるのです。

もつと解り易く云へば、党派心がなくつて理非がある主義なのです。朋党を結び団体を作つて、権力や金力のために盲動しないといふ事なのです。夫だから其裏面には人に知れない淋しさも潜んでゐるのです。(略)

それからもう一つ誤解を防ぐ為に一言して置きたいのですが、何だか個人主義といふと一寸国家主義の反対で、それを打ち壊すやうに取られますが、そんな理屈の立たない漫然としたものではないのです。一体何々主義といふ事は私のあまり好まない所で、人間がさう一つ主義に片付けられるものではないと思ひますが、説明の為ですから、ここには已を得ず、主義といふ文字の下に色々の事を申し上げます。或人は今の日本は何うしても国家主義でなければ立ち行かないやうに云ひ振らし又さう考へてゐます。しかも個

人主義なるものを蹂躪しなければ国家が亡びるやうな事を唱道するものも少なくはありません。けれどもそんな馬鹿げた筈は決してありやうがないのです。事実其は国家主義でもあり、世界主義でもあり、同時に又個人主義でもあるのであります。

(10) 森鷗外『青年』(『昂』明治43・3)44・8)

一体青い鳥の幸福といふ奴は、煎じ詰めて見れば、内に安心立命を得て、外に十分の勢力を施すといふより外有るまいね。昨今はそいつを漢学の道徳で行かうなんといふ連中があるが、それなら修身齊家治国平天下で、解決は直ぐに附く。そこへ超越的な方面が加はつて来ても、老荘を始として、仏教渡来以後の朱子学やら陽明学といふやうなものになるに過ぎない。(略、近代に近づいてシヨベンハウエルの厭世哲学が出来、次にニイチエが出て「生を領略する工夫」即ち苦しいけれども生を肯定することを生み出した)所謂観面に日常生活に打つ附かつて行かなくては行けない。この打つ附かつて行く心持がDionysus的だ。さうして行きながら、日常生活に没頭してゐながら、精神の自由を牢く守つて、一歩も仮借しない処がApollon的だ。どうせかう云ふ工夫で、生を領略しようとなれば、個人主義には相違ないね。個人主義は個人主義だが、ここに君の云ふ利己主義と利他主義との岐路がある。利己主義の側はニイチエの悪い一面が代表してゐる。例の権威を求める意志だ。人を倒して自分が大きくなるといふ思想だ。人と人とがお互にそいつを遣り合へば、無政府主義になる。そんなのを個人主義だとすれば、個人主義の悪いのは論を須^またない。利他的個人主義はさうではない。我といふ城廓を堅く守つて、一歩も仮借しないでゐて、人生のあらゆる事物を領略する。君には忠義を尽す。併し国民としての我は、昔何もかもごちやごちやにしてゐた時代の所謂臣妾ではない。親には孝行を尽す。併し人の子としての我は、昔子を売ることも殺すことも出来た時代の奴隷ではない。忠義も孝行も、私の領略し得た人生の価値に過ぎない。日常の生活一切も、私の領略して行く人生の

価値である。そんならその我といふものを棄てる事が出来るか。犠牲にすることが出来るか。それも慥たしかに出来る。恋愛生活の最大の肯定が情死になるやうに、忠義生活の最大の肯定が戦死にもなる。生が万有を領略してしまへば、個人は死ぬる。個人主義が万有主義になる。通生主義で生を否定して死ぬるのとは違ふ。どうだらう、君、かう云ふ議論は。」大村は再び歯を露はして笑つた。

熱心に聞いてゐた純一が云つた。「なる程そんなものでせうかね。僕も跡で好く考へて見なくては分らないのですか、そんな工合に連絡を附けて見れば、切れ切れになつてゐる近世の思想に、綜合点が出来て来るやうに思はれますね、こなひだなんと云ふ博士の説京都帝大の戸田海市の「社会主義と日本国民引用者注」だと云ふので、こんな事が書いてありましたつけ。個人主義は西洋の思想で、個人主義では自己を犠牲にすることは出来ない。東洋では個人主義が家族主義になり、家族主義が国家主義になつてゐる。そこで始めて君父の爲めに身を棄てるといふことも出来ると思ふのですね。かう云ふ説では、個人主義と利己主義と同一視してあるのだから、あなたの云ふ個人主義とは全く別ですね。それに個人主義から家族主義、それから国家主義と発展して来たもので、その発展が西洋に無くつて、日本にあると思ふのは可笑しいぢやありませんか。」

「そりやあ君、無論可笑しいさ。そんな人は個人主義を利己主義や自己中心主義と一しよにしてゐるばかりではなくつて、無政府主義とも一しよにしてゐるのだね。一体太古の人間が一人一人穴居から這ひ出して来て、化学の原子のやうに離れ離れに生活してゐたらうと思ふのは、丸で歴史を撥無私はくわしいのけ信じないことした話だ。若しさうなら、人生の始は無政府的だが、そんな生活はいつの世にもありやしなかつた。無政府的生活なんと云ふものは、今の無政府主義者の空想にしか無い。人間が最初そんなやうに離れ離れに生活してゐて、それから人工的に社会を作つた、国家を作つたと云ふ思想は、

ルソオの *Contract social* あたりの思想で、今になつてまだそんな事を信じてゐるものは、先づ無いね。遠い昔に溯つて見れば見る程、人間は共同生活の束縛を受けてゐたのだ。それが次第にその羈絆を脱して、自由を得て、個人主義になつて来たのだ。お互に文学を遣つてゐるのだが、文学の沿革を見たつて知れるぢやないか。運命劇や境遇劇が性格劇になつたと云ふのは、劇が發展して個人主義になつたのだ。今になつて個人主義を退治たいちしようとするのは、目を醒まして起きようとする子供を、無理に布団の中へ押し込んで押さへておよようとするものだ。そんな事が出来るものかね。」

(11) 柳父章『翻譯語成立事情』(岩波書店、昭和57・4)参照。

(12) 石川三四郎『虚無の靈光』(明治文学全集84『明治社会主義文学集』)筑摩書房、昭和40)参照。

(13) 幸徳秋水『長舌』(明治文学全集84『明治社会主義文学集』)参照。

(14) 『幸徳秋水全集』第七卷(明治文献資料刊行会、昭和57・4)参照。

(15) 関谷由美子『復讐劇×切札×乾酪の中の虫』『それから』の殺戮(『磁場の漱石』翰林書房、平成25・3)参照。

(16) 「個人は社会的存在である。だから彼の生命の発現は——たとえそれが共同的な、すなわち他人とともに同時に遂行された生命の発現という直接的形態で現れないとしても——社会的生命の発現であり、確認なのである。(中略)類意識として人間は、彼の実在的な社会生活を確認し、そしてただ彼の現実的な現存を思惟のなかで反復するにすぎない。ちよつと逆に類的存在は、類的意識において自己を確認し、そしてその普遍性のなかで、思惟する存在として対自的になるのである。／＼したがつて人間は、たとえば彼がどれほど特殊な個人であるにせよ、——そしてまさに彼の特殊性が彼を個人とし、そして現実的な個体的共同存在とするとともに——同じ程度にまた彼は思惟され感受された社会そのものの総体的性、観念的総体的性、主観的な現存であり、同様にまた現実においても、彼は社会的現存の直観や現実的享受とし

て、ならびに人間的な生命の発展の総体として現存するのである。(マルク
ス『経済学・哲学草稿』「私有財産と共産主義」より)

付記

本論考は次の学会口頭発表などに基づくものである。

「夏目漱石文学の基本構造」(東北アジア文化学会、平成25・11・2、韓国啓
明大学校)

近代文学会北海道東北合同研究集会 平成26・8・9 青森図書館

「夏目漱石『それから』と幸徳秋水の社会主義——弁証法的無政府主義厭世主

義Dialectic Anarchism Pessimismとして読み解く夏目漱石文学の基本構造・

金メッキからカネへ、カネから自然へ」

東北アジア文化学会 平成26・10・18、韓国釜慶大学校「夏目漱石の個人主

義——森鷗外との比較——」

修士論文題目及び内容の要旨

『永日小品』論

鈴木麻綾

夏目漱石と言えば前期・後期それぞれの三部作や『道草』や『坊っちゃん』など、小説仕立ての作品が今でも読み継がれており、国民作家として名高い。研究もそのような作品に集中してきた。

だが、近年になって、これまであまり注目されてこなかった小品にも注目が集まってきている。本論では漱石の小品の中から『永日小品』を取り上げ、漱石作品の中での位置を考察している。

夏目漱石『永日小品』は大阪朝日新聞からの依頼で書かれ、明治四一年一月一日から三月一二日まで東京、大阪両朝日新聞に連載された二五篇の小品を集めたものである。「永日」とは日中が長く感じられる春の日や春の日永を表す春の季語だが、「小品」とは文章の一つのスタイルのことである。

本論ではまず、『永日小品』の題にもなっている「小品」というジャンルについて先行研究を整理しながら、その概要をまとめていく。「小品」あるいは「小品文」とは、ごく簡単にいえば、短い文章である、という以外には拘束のない文章であるといえる。この「小品」は他の小説や詩などの他のジャンルに比べて、形式や筋などを気にせず、思うままの文章を書くことができるのである。もともと存在していた文、特に散文の領域の中で西洋からの「小説」という概念の移入によって、一時の隆盛の後に「小説」に淘汰される運命を宿して、定義のしがたい雑多なジャンルが生み出されたのであろう。このような

「小品」特徴から、『永日小品』においても、様々な内容の小品が収められており、それら一つ一つの小品において実験的な表現なども試みられている。その中でも特に本論では「空間的な閉塞」と「歩行」という二つの表現に焦点をあてながら、漱石作品における『永日小品』の位置について考察する。

また、小品が漢詩の空白期に書かれていたことに触れ、漢詩についても小品とのかかわりなどを中心に考察している。『明暗』執筆時代の漱石は、小説執筆の傍ら、俗了された心のバランスを取るために漢詩を作るのを日課としたことは有名である。漱石は幼少の頃より漢文学に親しみ、漢詩は生涯を通して作り続けた。だが、その心を遊ばせる世界としての漢詩が、ロンドンへの留学を境に一〇年間断絶するのだ。その間漢詩の代わりに多く書かれたのが小品である。漱石にとつて小品は漢詩の代替品として書かれたものであったのだろうか。

『永日小品』の中からは「空間的な閉塞」についてと「歩く」というモチーフを取り出して考察する。どこまで行っても同じ街並みが続き、群集に埋め尽くされたり濃い霧がたちこめたりして行き場を失ったりするなど、今いる場所から抜け出せない、何らかの障害によってその街に閉じ込められてしまったような描写が『永日小品』にはたびたび見られる。語り手がこのような「閉塞的な空間」にい

る場合、不安や心もとなさなどが語られる。一方、開放的な空間の中では、暖かさや安心、平和が共に語られている。こうした表現の中で、後の小説につながるような回転するイメージやランプなどのモチーフを確認することができる。

「歩行」はありふれていて、何ら特別だとは言えない行為である。しかし一篇の作品がどこまでも歩くことのみで開始する、ただひたすら歩き続けるというだけで一つの作品が閉じられるというのは、物語の筋としては特異なことではないだろうか。歩くということに焦点が絞られ、その歩行によって物語が進行し、閉じられるという作品が『永日小品』にはいくつもある。このように「歩く」という特徴的なモチーフは『永日小品』の中で何度も用いられており、特徴的に語りだされていることにどのような意味があるのか考えていきたい。

このような「歩く」ことやというモチーフや空間的な描写の『永日小品』の中の広がりをつまみ、その他の漱石作品との差異や類似などについて見極め、「歩く」というモチーフから見えてくる『永日小品』の作品世界の一側面について検討していく。

以上のように『永日小品』には様々な表現の試みがなされており、他の漱石作品の萌芽となるモチーフもみられる。前期の浪漫的で幻想的な作風もどこかに感じさせつつ、その後の作品への繋がりも見られるという意味で、『永日小品』は前期から後期へと移行する漱石の実験的作品といえるのではないだろうか。

室生犀星における魚のイメージ

鷲尾 日香里

室生犀星は生後間もなく名もつけられないまま生みの親から離されて、生家近くの兩宝院に貰い子に出された。養母となった赤井ハツは「馬方お初」という異名をとる気の強い女性で、犀星はハツに煙管で打たれることもあったという。家には他にも姉のテエと兄の真道、縁女としてきんがいたが、いずれも犀星と同じく貰い子で、血縁のある者は誰もいなかった。こうした血の繋がらないいびつな家族の寄せ集まった環境で育った少年犀星は、周囲の自然やそこに生きる生き物たちに慰めを見出した。犀川べりで自然の風景を観察し生命を見つめながら過ごした思索の時間が、犀星の文学を育んだ。犀星は犬や猫だけではなく、昆虫や蛇などたくさんの生き物作品に登場させる。そのような犀星文学の中から見出されるモチーフの中でも、「魚」は最も重要なもののひとつだろう。犀星は、初期の詩集から始まり晩年の小説にいたるまで、詩、小説、俳句、随筆とさまざまなジャンルの作品に魚が登場させている。室生犀星ほど「魚」に心を寄せ、生涯にわたってそのモチーフを作品に昇華させ続けた作家はいないだろう。

犀星の描く魚のモチーフは、二つに大別できる。一つは初期詩集に多く見られる「青き魚」のイメージである。もう一つは、晩年の傑作の一つ『蜜のあはれ』(昭和三十四年十月)で大きく花開いた赤い「金魚」のイメージである。先行研究では、奥野健男の「青き魚

——室生犀星の詩的故郷(昭和四二年十月「季刊芸術」)を端緒として、犀星の魚が何を表現するイメージなのか度々論じられてきたが、「青き魚」と「金魚」のどちらをも扱った総括的な論にはなっていない。そこで本稿では、犀星作品の全体を通して「魚」というモチーフについて考察し、犀星の魚のイメージの表出の仕方の変遷を辿っていった。

第一章では、初期詩集に頻出する「青き魚」のイメージを取り上げる。「青き魚」は犀星の「魚」の出発点であり、原像でもある。複雑な家庭環境にあった幼い犀星は、犀川の周辺の自然とそこに棲む生きものたちとの交流によって、その行き場のない孤独感を慰めた。そこを原点とし、自らの心象を投影した分身のような「青き魚」は生まれ、犀星の意識と深く結びついた。更に「青き魚」はその触覚を認知することによって心象世界と現実世界を隔てる境界を越え、自由な想念的存在として泳ぎ始める。

同時代に、交流のあった斎藤茂吉や、日本に流入し始めた後期印象派絵画の影響を受けた炎を纏った魚のイメージも生まれた。炎は宗教性を感じさせながらも、それを越えた作用を持つ、生命を産み出す炎である。これは後に『蜜のあはれ』の「燃える魚」である金魚に繋がっていくイメージだと考えられる。魚と自己の照応が中心となっていた「青き魚」のイメージから離れ、魚を別の象徴として捉える

萌芽がこの時期に立ち上がったのである。そして犀星の魚は同時代に交流のあった人魚詩社の同人、萩原朔太郎と山村暮鳥にも影響を与える。「朱鸞」への寄稿、詩と音楽と宗教の研究を目的とする人魚詩社の設立、雑誌「卓上噴水」「感情」などで親交を結んでいた彼らのイメージの共有は大きいものがあつたが、朔太郎は魚を恋情を基盤にした「恋魚」、暮鳥は信仰心と己の実際との葛藤を託した「銀魚」を生みだし、それぞれ自分の文脈に引き寄せて「魚」という詩語を用いた。しかし、やはり最後までこのモチーフを扱い続けたのは犀星だけであつた。

第二章では、大正九年十二月に『赤い鳥』にて発表された童話「寂しき魚」について取り上げる。「寂しき魚」で特徴的なのは、主人公の魚の形態である。犀星は度々空を泳ぐ魚や樹上を泳ぐ魚といった非現実的な幻想の美しい魚を描きだしてきたが、「寂しき魚」の主人公の魚はそれまでの魚とは全く異なつた形態を持つ。それは舞台となる古い沼の描写も同様であり、故郷金沢の原風景的な沼と青年時代の犀星が放浪した浅草の歓楽街的な汚れや重苦しさといった要素を取り込んだものとなつている。より死のベクトルに引きつけた筆致は虚無的であるとも言える。そのために童話としての難解さを目指すことになるが、犀星がこの後も自然界の幽かな生きものの生と死の美しさ、そして哀れさを表現し続けていく萌芽を、「寂しき魚」には見ることができるのである。

「寂しき魚」は童話として書かれた。犀星童話には、動物を扱つたものが数多く見受けられる。その中でも犀星の生きものへのまなざしがよく表れている戦時下の児童詩集、『動物詩集』を取り上げた。この詩集の特長は日常生活に近い場所にいる動物だけではなく、取るに足らないような虫けらにまで固有性を持った感情のある存在と

して、それぞれの生きものを発見しているところにある。その一方で、『虫寺抄』や『川魚の記』で見せた冷静な観察眼も忘れることはなかつた。そこには命の在りかを見つめようとした犀星の姿勢がうかがえるとと言える。

第三章では、犀星の「魚」のイメージの二本柱のひとつ「金魚」のイメージについて考察する。まずは金魚像の変遷を、金魚を取り上げた詩を拾いながら読み解いていく。「金魚」については初期の犀星作品では、語り手は一貫して、金魚にきらびやかな色彩と華美な尾鰭に美しさの反面娼婦のような汚濁を見出しており、あまりポジティブな心証を持つて描かれなかつた。そのためか作品数もあまり多くはないが、金魚を詠つた詩を見ていくと年代を下るにつれ徐々にその美醜のバランスが変化していくことが分かつた。

そしてその金魚の結実というべき『蜜のあはれ』があらわされる。『蜜のあはれ』の金魚は、老境を迎えた犀星が見つめた「生」と「性」の意識が託された「燃える魚」であつた。金魚に絡んで引きずられていた娼婦性も、金魚を金魚でありながら少女であるという境界性を越える力を持つたキャラクターに造形したために中和され、可愛らしさやシュールさが前面に押し出された。しかしそのために「生」と「性」のドラマは曖昧なまま残つてしまつた。

第四章では、『蜜のあはれ』以後の作品を見る。まず犀星の晩年意識について、昭和二十代から三十年代の詩を取り上げる。

語りつくされないまま終つてしまつた「生」と「性」の意識が持ちこされた作品として、「水の中」と「鮪の子」について考察した。「水の中」は『蜜のあはれ』の続編として書かれた。研究シーンにはほとんど取り上げられてこなかつたが、犀星の「魚」のモチーフの晩年の変化を見るために重要な作品であると考えられる。『蜜のあはれ』の金魚

の生まれ変わりとされながら「燃える」「赤」という強烈なイメージを失った形で転生した「水の中」の金魚には、生命の絶頂、燃焼の後に立ち現れる幽遠の境地がある。そこには個体の死を経て世界に輪郭が溶け込んでいくような命の感受性を見ることができるとはならないか。

もう一点残っていた問題である「性」の燃焼というドラマは、「鮎の子」に持ち越された。主人公である鮎子は、愛も情もないという世界の非情な理に曝されながら、卵を生みつけるため一心不乱に上流を目指す。ここでは性と生と死は繋がっている。『蜜のあはれ』のシニールさやファンタジーな部分はそぎ落とされ、ひたすら生き物が次代に子孫を残すことにその命の意義は集約された。それは家族の元に生まれることのできなかつた犀星の根源的な願望であった。最晩年になって犀星は自己の原点に回帰し、「生」と「性」の燃焼のドラマもここに行き着いたのではないだろうか。

犀星は生物無生物問わずあらゆるものに関心と愛情を寄せた作家だったが、魚は中でも特別なモチーフだったのでないだろうか。それほど「魚」は犀星が生きている時代に合わせて、そのとき自分が取り込んだものによって様々に姿を変化させながら、「魚」として表出され続けてきた。犀星にとって「魚」とは、自己の生の原像であつたと言えるのではないだろうか。

宮城学院女子大学大学院人文学会会則

第一章 名称及び事務所

第一条 本会は、宮城学院女子大学大学院人文学会と称する。

第二条 本会は、事務所を宮城学院女子大学大学院事務室内に置く。

第二章 目的及び事業

第三条 本会は、人文科学に関する研究を推進し、会員の知見を高めるとともに、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 各種研究会、研究発表大会及び講演会等の開催
- 2 機関誌、会報及び会員名簿等の発行
- 3 他の研究団体・機関等の連絡及び協力
- 4 その他、本会の目的を達成するために必要と認められる事業

第三章 会員及び組織

第五条 本会は、次の一般会員及び特別会員をもって組織する。

- 1 一般会員
 - (1) 本学大学院人文科学研究科に学生として在籍中の者及び同大学院を修了した者
 - (2) 本学大学院に研究生又は科目等履修生として在籍中の者及び在籍したことのある者
 - (3) 本学大学院を中途退学した者
 - (4) 本学学芸学部を卒業し、他学大学院に学生として在籍中の者及び他学大学院を修了した者

2 特別会員

- (1) 本学大学院人文科学研究科に専任の教員として勤務している者及び勤務したことのある者
- (2) 本学大学院に兼任又は併任の教員として勤務している者及び勤務したことのある者
- (3) 前号の規定する以外の者の有志で、本会則第七条に規定する委員会の推薦により、総会において承認された者。ただし、本号に該当する会員は、本会則第七条及び第八条の規定に係る権利をもたない。

第四章 会員の権利及び義務

- 第六条 会員は、次の権利及び義務を有する。
- 1 機関誌、会報等の配付及び本会が開催する諸事業の案内を受け、随時、研究成果を発表することができる。
 - 2 会費は、毎会計年度内の指定された日までに納入しなければならぬ。
 - 3 三年間継続して会費を滞納した場合には、会員の資格を失う。

第五章 役員及び任務

- 第七条 本会には、次の役員を置き、委員会を組織して、事務及び運営に当たる。
- 1 会長 一名
会長は、本会を代表し、会務を統括する。

2 委員 若干名

委員は、委員会を組織して会長を補佐し、本会の事業を遂行するために、会務の運営と執行に当たる。

3 監査委員 二名

監査委員は、本会の会計を監査する。監査は、毎会計年度末に行う。ただし、必要に応じて、随時、行うことができる。

第六章 役員の選任及び任期

第八条 本会の役員は、次の方法によつて選任する。

- 1 会長には、本学大学院人文科学研究科長を推戴する。
- 2 委員は、一般会員及び特別会員の中から推薦又は選挙によつて選任し、総会の議を経て、会長から委嘱する。
- 3 委員会の委員長及び副委員長は、委員の互選によつて選任する。
- 4 監査委員は、委員の中から互選によつて選任し、総会の議を経て会長から委嘱する。

第九条 役員の任期は、一年とする。ただし、再任を妨げない。

第七章 会議等の開催及び議決

第十条 本会は、毎年一回定期総会を開き、会務について報告し、審議する。総会は、本会会員の二分の一以上の出席を持つて成立する。ただし、委任状を含むものとする。議決には、出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

第十一条 会長は、会員の五分の一以上の要請又は委員会の議に基づいて、臨時総会を招集することができる。

第十二条 委員会は、随時、開くものとする。

第十三条 研究発表大会は、総会の日程に併せて開催するものとする。

る。

第八章 会計

第十四条 本会の経費は、会費その他の収入をもつて充てる。

第十五条 本会の会費は、年額千円とし、四月末日までに納入するものとする。ただし、臨時に要する費用は、その都度、徴収することがある。

第十六条 本会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第十七条 本会の会計並びに監査に関する報告は、毎年一回、総会において行う。

第九章 会則の変更

第十八条 本会則の変更は、委員会の議を経て、総会の承認を得るものとする。

附則 本会則は、一九九八年十二月二十三日から施行する。

宮城学院女子大学大学院人文学会誌

第 十六 号

二〇一五年三月三十一日発行

編集及び
発行人

宮城学院女子大学大学院

〒九八一―八五五七

仙台市青葉区桜ヶ丘九―一―一

人文学会 田島 優

☎(〇二二)二七九―五八三四

印刷所

株式会社 東 誠 社

仙台市宮城野区岡田西町一―五五